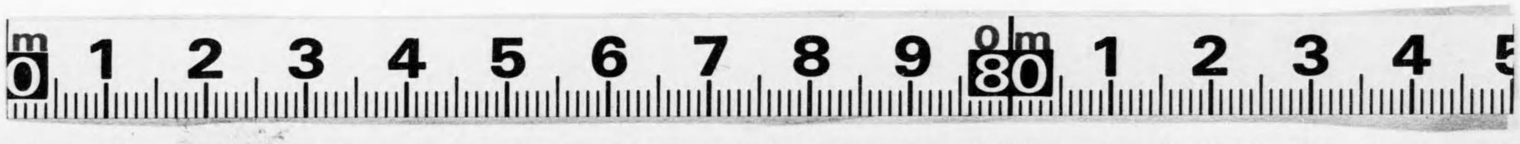
550
148

投



明治天皇御製集

大正
15. 12. 7
内交

明治天皇御製「寄竹祝」の御宸翰は、明治十八年二月二十四日、山階宮晃親王殿下古稀の賀に下し賜ひ、宮家にては神靈として尊崇淺からざるものなり。今回宮家格別の思召を以て、本書の卷頭に奉掲するを許させられたるは、編者の深く光榮とし讀者と倶に多大の感謝を表するものなり。

（禁複製）

明治天皇御巡幸「浴竹園」の御宸筆寶物

明治十二年二月十四日、宮家に於て御巡幸の際使用せられたる本書の巻頭へ光榮より奉獻せられたり。

（藤寶堂）

明治十二年二月十四日、宮家に於て御巡幸の際使用せられたる本書の巻頭へ光榮より奉獻せられたり。今回宮家林泉靈王より賜はる勅書に基づき思召を以て大正の盛儀に際し、明治天皇御巡幸の際使用せられたる本書を謹んで奉獻する旨仰せ出でられたり。

550-148

謹輯の辭

一、明治天皇は不世出の英主にましませしは申すも畏し、兼ねてまた古今に稀なる歌聖にあらせられ、萬機親裁の御暇に物に觸れ事に感じて詠み出でさせられし大御歌は、實に拾萬首の多きに及びたまひ、その洪大無邊なる御文德も亦國民の均しく敬仰措く能はざる所なり。

一、謹みて御製を拜誦し奉るに、敬神崇祖、國を思ひ民を慈み、四海の和平を望ませられ、又政治、軍事、教育、産業等より禽獸蟲魚の末に至るまで詠み出でさせられ、崇高仁慈、一として神ながらなる御風格の發露ならざるなく、洵に天意ともまた神の御詞とも稱へ奉るべきものなり。

一、天皇の御製は教育勅語と共に、朝に夕に兩々拜誦牢記して、聖德を仰ぎ仁慈の大御心を偲び奉りつゝ、各自修養の規箴となし、進みては社會教化

の活ける經典となし國民道德の教憲となさば、庶幾くは聖慮に副ひ在天の神靈を安んじ奉ることを得べきか。是れ編者が敢て本書を謹輯せる所以なり。

一、御製に關する類書は文部省發行の御本集を始め、數十種の多きに及ぶと雖、或は卷帙大に過ぎて拜誦携帶に便ならず、或は御製の數僅少にして廣く大御心を偲ぶ能はざるの憾あり。特に民間出版のものにありては訛字誤植頗る多く、甚しきに至りては昭憲皇太后の御歌を御製と誤り傳へたるものも亦尠なからず。是れ亦編者が敢て本書を謹輯せる所以なり。

一、本書はこれを上下の二卷に分ち、卷上には文部省發行『明治天皇御集』の御製千六百八十七首を謹錄し、卷下には明治神宮寶物殿の御製三首を始め、世に傳へられたる御製四百四十餘首を蒐集校訂して併錄せり。

一、本書は御本集に準じ總て御製の年代順に序列し、年代の詳ならざるものは末尾に集錄せり。而して御題はこれを上段に揭出し、その字數多きものは行間に挿入せり。御題の同じきものはこれを省略し、その不明なるものには〇符を附せり。

一、天皇の御製として世に洩れ傳へられたるものゝ中、昭憲皇太后の御歌並に他の歌を誤り傳へたるものはこれを除外し奉れり。而して編者寡聞にして考證の及ばざるもの亦多し。今姑く卷末に附錄して識者の示教に俟つことゝせり。

一、御製の蒐集と校訂とに就ては少なからざる苦心と努力とを費しその參考書目實に三拾餘種の多きに及べり。されぼその校訂の正確にして御製數の多きと、特に御製の年代を明にしたる等、多くの民間出版の類書と全然その撰を異にし、玆に權威ある御製集を刊行するを得るに至れり。

一、本書刊行に就ては特に宮內省の許可を得、御歌所長子爵入江爲守閣下は

本書の爲題簽を謹書せられ、同寄人千葉胤明先生は終始懇篤なる指導と嚴密なる校閲とを與へられ、且又御製公表の由來を詳記してその經緯を明にせられたるは、讀者と共に深厚なる謝意を表するものなり。

一、明治天皇神去りましてより既に十有五年、神德愈々高く國民追慕の情益益切なり。玆に公許を得て御製集を謹輯し、これを國民に頒ち以て後昆に傳ふるを得るは編者の深く光榮とする所なり。

大正十五年十一月三日
明治神宮御例祭の日

岩永淳太郎謹識

御製の御發表に就きて

畏くもあきつ神と仰奉りて廿餘年仕へ奉りしわが　明治天皇は允文允武の大英主にましくして、皇威は八紘に輝き仁德は四海を濕ふし玉ひしは今更めて何をか語らん。自分は唯專心奉仕したる敷島の道に於て、異常なる大歌聖に在らせられし其一班を演釋して一生を終らんと決心して居るのであるから、口に筆に此事と終始して斯道の御高德を偲び奉らんとするのである。

謹で惟るに御父皇孝明天皇の御遺訓による事とは申ながら、既に御七歳にして觀月の御歌を遊されてより、御在位四十五年に渉りて無慮十餘萬の御製を遊され、明治二年京都清涼殿にて御世始の歌御會始を行はれたこのかた、四十四年の永きに渉りて御會始を行はせざりしは、廿八年の日清事變に廣島大本營に御駐輦の折一回と、英照皇太后崩御の爲に三十年三十一年の二回と

に止まりて、然も御題を賜らざりしは眞に一年もなく、御親ら範を垂れ玉ひて、明治三年には皇族、華族、勅任等の詠進すべく太政官の布達あり、七年よりは一般臣民の詠進を許され、十二年よりは預選披講の光榮をさへ許し玉ひ、斯道に於ても君臣一體の御實例を示し玉うてこの大御代に及び、幾多の他の學術に超越したる殊遇を賜る事は苟も斯道に志ある者誰か感泣せざるものあらんやである。春秋幾變遷其の長き御行爲は姑く措いて、わが帝國として最大國難たりし日露戰役當時の狀況に就て略述し奉らんに、國事多端、內外非常の秋に方つて、一面には軍國の萬機を鬱はされながら、一面には絢爛たる御心の華を御自在に開かせられし　明治天皇の如何に御雄々しくもまた優に御やさしい御日常であらせられた事であつたらうか。而してその御製の多くは仁慈大量なる大御心から潤ひ出づる大御惠の露の輝きであつた。自分等は常に御歌所にあつて御製を拜寫し奉つて居つたから深く〳〵肝に銘して

忘るゝ暇は無かつたのであるが、殊に御歌所長拜見濟の御製を返上の爲に、捧持して內大臣兼侍從長の處に行く度毎に、室の內外に涉りて長い御廊下にまで新しき白木造の棚に御璽の押された數百千の勳記が印肉を干かす爲に陳列せられてあるのを拜見した。是やがて名譽の戰死者または殊勳者に賜るべき物である事は申すまでもない。又その一方の御內儀におかせられてはかしこくも皇后宮御親しく繃帶製作を遊さるゝといふ御有樣を拜承しつゝ深刻に感じたのは、若しこの時に於て優渥なる聖慮の程を外は出征將士も、內は一般臣民も拜誦する事が出來たならば、士氣振興の上にも、民心緊張の上にも非常なる効果があらうと思ふことであつた。で、此事を高崎先生に話しをすると、先生はそれは言ふ迄もない事である、自分も疾くより心懸けては居つたのであるが、嘗てかういふ事があつたといつて、次のやうに語られた。

先年自分がある御製を拜見して感歎の餘りに、これを岩倉公に話したのを

又三條公に話され、それからそれへと推し廣まつて、遂に一般にも拜誦申し上げるやうになつたことが、いつとはなく御聞に達したが、その時に許さぬうちは餘り洩らしてはならぬと仰せられた御事があつたから、今更これを自分の口より申上げられないのが誠に遺憾至極であるとの事であつた。自分はもう取り付く島も無いやうに思つた。併しながら更に考へて見ると、今や忠勇なる將士は澤國江山到處に身命を顧みずして、君國の爲に盡して居る一方には、また忠良なる同胞が一層家業にいそしんで、毫も後顧の憂なからしめんが爲に、孜々營々として勉め勵んで居るのは、これは臣民として當然の義務であるとは言ふものゝ、而もその勞苦は決して筆舌の能くする所ではないのである。英明仁慈なる　陛下にあらせられては辱けなくもこの民の勞苦を御憐察遊ばされて、戰場はかうもあらう、淋しい留守の家々はかうもあらう雨や、風や、暑や、寒さにはまた如何に過ごすことであらうと、只管叡慮を

惱まさせられた御有樣が、一度び金玉の御製となつて現はれたのを、お洩し申上げることの出來ないのは眞に千秋の恨事であるが、併しこの上願ひ上げる途は無いと思へば思ふほど、益々心がはやるばかりであつたから、私にこれを一は高崎先生の親友なり一は姻戚なる、時の海軍々令部長伊東元帥や伊集院次長に物語ると、それは至極の事であるから何とか拜謁の機を見て是非に御願ひ申し上げて見やうと言はれたが、その後伊東元帥から昨夜御陪食の時　天機殊の外麗しく拜せられたから、山縣公や伊藤公と共々に御願ひ申上げて見たが「こんなつまらぬ歌をどうするか」と仰せられた許りでとんと御取上げが無かつたのは、御謙讓の御德譬ふるに物なき次第なりとはいへ誠に殘念であると言はれた。そこで自分はまた高崎先生の下に走つて委曲を盡して自ら揣らざる罪を謝し、もう此上は先生に何とか御工夫を乞ふより外はないと申した所が、先生は一晩よく考へてみやうと申されたから翌日また先生

を訪ねると、先生は破顔一笑、やつと氣がついたがこれは何でも無い事であつた。自分は御維新當時に於て既にこの命を　陛下に捧げたのであるから、寧ろ今日まで餘生を保つ事を得て　天寵を辱うするのが不思議な位である。只この白髮首を召される事を覺悟したならばいと易い事であるから、貴公達は直に御製の中から御加點の分を百首位づゝ三四通拜寫するやうにといはれたので、自分は實に狂喜せん許りに喜び、御歌所に出仕して同僚鎌田正夫と共に時を移さず拜寫し終つてこれを先生に差し出すと、先生はこれを一通は田中宮內大臣に、一通は德大寺侍從長に、また一通は岩倉侍從職幹事に差出されて、更に添へて言はれるには、これはお上に申上げて賜つたのでないから、違勅の罪は自分の一身を以て御詫び申し上げて決して貴卿方に御迷惑は懸けぬ。けれども斯る事をするといふことだけは御承知置を願ひたいと申されて、それから天下の報道機關たる新聞雜誌等の乞ふがまゝに授けられたのであつた。かくて引續き御洩しになつた御製の數は五六百首にも及んだであらう。當時一般人士が等しく拜誦して感銘激勵せし所のものは、これ全く高崎先生が決死の御蔭であるといつてもよいのである。當時伊藤公の如きは餘りに數多の御製が新聞雜誌等に上揭せられるのを見て、潛かに高崎先生に向つて、實に有難い事ではあるが過日は伊東元帥や山縣公等と願ひ試みたけれども御許しがなかつた位である。一時にかう多數をお洩し申しては却つてお目に止るやうな事になりはせぬか、若しさある時に於てはいかなる御咎があるかも知れないから、寧ろ少しづゝ折を見て御洩し申し上げたならばと忠告せられたが、先生は既に覺悟の前であるから何時如何なる勅諚を拜するかも知れないと思へばこそ。一時も早く一首でも多く同胞に知らせて置きたいと思ふ心には一身を顧るの暇もない、一旦勅諚を拜すればもう最後であると答へられた。何たる壯烈な意味であらう。併しながら　明治天皇の仁天の恩、

遂に何等の御咎めも無かつたのである。

御製を御洩し申し上げることは斯くまでに至難な事であつた。從つてよしこの時に高崎先生の此の大決心が無かつたならば、高壯雄大にして深遠莊重縹緲たる神韻の裕かな　明治天皇の御製を何時拜することが出來たか、蓋し測り知る事が出來なかつたのである。

この先生の決心の折、時の宮內大臣田中伯は次の樣な事を言はれた。高崎翁が維新當時國事に盡した事は我輩も能く知つて居るが　陛下に十萬の御製を遊ばす迄の御信用を得たるのみならず、この國家の大難事に當りて死を決して御製を洩し上下を通じて忠君愛國心を振興したる功勞は實に伯爵に値ひするものであると、以て其の當時如何に上下の人々に感動を與へたかを知るべしである、

至仁至孝なる　今上陛下に於かせられては、夙に玆に御軫念あらせ給ひ、

大正五年に　明治天皇の御製御編纂の　勅命あらせられて、御歌所にその臨時編纂部を設けられ、御歌所長入江子爵を部長として、山縣、德大寺の諸公之が顧問となり自分もその委員の一人に參加するの光榮を荷うたのであるが爾來四年の後即ち大正八年に至つて御編纂は完成上奏を遂げたのであつた。

抑この御事業といふは、これ一は　明治天皇の御聖德を永く後代に留め、億兆にいや深き大御心を傳へさせ給はんことを謀らせられ、一はまたその御製を以て明治鴻猷の源叢たることを御記念遊ばされやうとする　今上陛下の御孝道と叡慮とを拜察し奉るのである。實に　明治天皇の御製は日常の御感想を有りの儘にお述べ遊ばされたのであるから、眞の勅語はこの御製であると申し上げても宜いのである、而してその總括せられて御文章となつて現はれたのが即ち教育勅語その他の詔勅である。さればこの細かい御製を拜してから詔勅を拜しても、また詔勅を拜してから御製を拜しても、何れよりする

もその間に寸毫も差支は無いのであることは、特に注意して服膺しなければならぬ所である。國家の經論も、一身の練磨も一に玆に基くべきものである事を忘れてはならぬ。のみならず進んでは世界人類に無二の大經典たる事を知らしめなければならぬと思ふのである。終始一貫この御聖慮普及に獻身的に奉仕しようとする自分の考は決して無要の行動とは思はぬ次第である。

此度岩永君が彼の當時に洩されたる御製の內に御本集に加はらぬ數百首の御製を集めて其の誤謬を正し、御年代を整へる事に努力せられ、宮內省の公認を得て之を世に公にせられんとするに當り自分は從來此の事の必要を痛感しつゝあつたので歡喜と御追懷の情に堪へず謹で此の數言を拜述する。

大正十五年十一月三日

御歌所寄人　千葉胤明　謹識

明治天皇御製集

目次

卷上

明治十一年以前……二〇首……一頁
同　十二年……五……四
同　十三年……五……四
同　十四年……三……五
同　十五年……一一……五
同　十六年……二七……七
同　十七年……二六……九
同　十八年……一四……一一
同　十九年……一九……一三
同　二十年……七……一五
同　二十一年……一……一六
同　二十二年……一……一六
同　二十三年……五……一六
同　二十四年……二……一七
同　二十五年……九……一八
同　二十六年……五……一九
同　二十七年……七……一九
同　二十八年……一……二〇

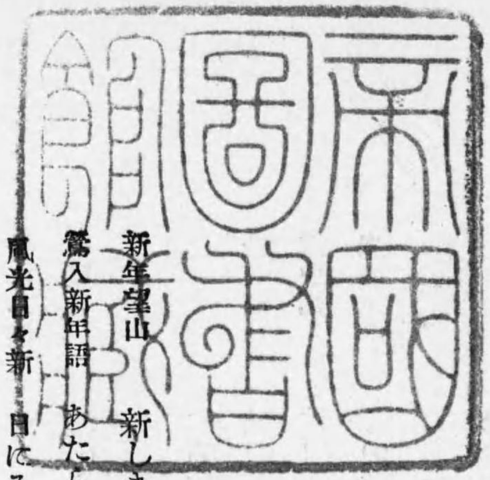
明治二十九年……四〇……二〇
同　三十年……一七……二四
同　三十一年……三三……二六
同　三十二年……二五……二九
同　三十三年……一三……三一
同　三十四年……二一……三二
同　三十五年……四二……三四
同　三十六年……七八……三八
同　三十七年……二八〇……四五
同　三十八年……一九七……六八
同　三十九年……一五一……八五
同　四十年……一九一……九八
同　四十一年……七六……二四
同　四十二年……一〇四……三〇
同　四十三年……一〇四……三九
同　四十四年　五六　一三八
同　四十五年　七三　一四三
附　載　一八　一四九
計一六八七

卷下

新年勅題……一二……一五五
明治七年……二……一五七
同　十四年……一……一五七
同　十六年……三……一五八
同　十七年……一……一五八
同　二十三年……一……一五八
同　二十九年……三……一五九
同　三十六年……一……一五九
同　三十七年……五一……一五九
同　三十八年……九……一六四

同　三十九年……一二……一六五
同　四十年……三六……一六六
同　四十一年……二二……一六九
同　四十二年……一五九……一七一
同　四十三年……二七……一八五
同　四十四年……二九……一八七
年代不詳……五二……一九〇
附　錄……二一……一九四
計四四二
總計二一二九

明治天皇御製集　巻上



新年望山

新しき年を迎へてふじのねの高きすがたを仰ぎみるかな

鶯入新年語

あたらしき年のほぎごといふ人におくれぬけさの鶯のこゑ

風光自々新

日にそひてけしきやはらぐ春の風よもの草木にいよゝふかせむ

明治十一年以前

寒香亭にて梅を見て

まさかりの梅の林にさす月のかげさへかをる春のゆふぐれ

明治十一年以前

明治十一年以前

梅のもとに箒をたかせて

白妙のうめもかゞりにてらされて薄紅ににほふよはかな

折にふれて

おみどもと駒はせゆけば大庭のうめの匂をちらすはる風

浦夏月

波のうへに見るより涼し須磨のうらの松のこのまの夏のよの月

駒をはせてゆきけるに蓮池に月のうつりて見えければ

はちすばの露にやどれる夕月の光すゞしき池のおもかな

秋夜長

秋の夜のながくなるこそたのしけれ見る巻々の數をつくして

霧中鴈

秋山のふもとも見えぬ夕霧にこゑのみわたる鴈のひとつら

庭菊

この秋もところ〴〵にきくの花うゑてたのしむ九重のには

ある夜侍補の輩をめしあつめて

寒月

あきのよの長きにあかずともし火をかゝげて文字をかきすさびつゝ

ふけゆけばいよ〳〵寒し淺茅生の霜にきらめく冬のよの月

國

人もわれも道を守りてかはらずばこの敷島の國はうごかじ

日本武尊

まつろはぬ熊襲たけるのたけきをもうち平げしいさを雄々しも

述懐

いにしへのふみ見るたびに思ふかなおのがをさむる國はいかにと

近きころ作りし宇都の山の洞道をすぎて

をぐるまのをす巻きあげてみわたせば朝日に匂ふ富士の白雪

京都にありて

住みなれし花のみやこの初雪をことしは見むと思ふたのしさ

嵐山の木の葉をあつめて香となしたるをたきて

ふるさとの木々の落葉のたき物を袖にとむるも嬉しかりけり

京都よりかへりける船の中にて

あづまにといそぐ船路の波の上にうれしく見ゆるふじの芝山

明治十一年以前

明治十二年

新年祝言　あらたまの年もかはりぬ今日よりは民のこゝろやいとゞひらけむ

山月　山の端をはなれもあへず久方の空にみちぬる月のかげかな

海上曉月　湊船あさびらきする波の上にうつるもうすき在明の月

馬場よりのかへるさ月を見て

のる駒の手綱かいくりかへるさにかへりみすれば月ぞいでたる

またの時紅葉のひともと色づきたるが見すぐしがたくおぼえければ

常磐なる松の木のまの初紅葉いろめづらしと折りてけるかな

明治十三年

雲間月　むら雲のたえま〳〵に夕月夜さすかとみればかつかくれつゝ

月不擇處　萩の戸の露にやどれる月影はしづが垣根もへだてざるらむ

菊　うつろふな霜はおくともわが見つゝ樂む庭のしら菊の花

紅葉淺　一枝はもみぢしにけりむら時雨いそぎてそめよあとのこずゑも

庭上鶴馴　なれ〳〵てへだて心もなかりけりわが九重のにはにすむ鶴

明治十四年

月夜蟲　霧はれて風しづかなる秋のよの月にすみゆく蟲の聲かな

爐邊述懷　埋火をかきおこしつゝつく〴〵と世のありさまを思ふよはかな

竹有佳色　うゑおきし庭のくれ竹よゝをへてかはらぬ色のたのもしきかな

明治十五年

明治十五年

水邊夏草　夏草の茂れるかげも川水にうつるを見ればすゞしかりけり
夕立　たかまやま空にとゞろくいかづちの聲にきほひて夕立ぞふる
嶺夕立　村雲のおほふと見しは夕立のみねより嶺にかゝるなりけり
海邊夕立　かきくもり降るゆふだちに荒磯の波もしばしは音なかりけり
初秋日　いつのまに秋は來にけむあまの原夕日のかげもすゞしかりけり
故郷萩　ふるさとゝなりし都は萩の戸の花のさかりもさびしかるらむ
波間月　久方の空ゆく月も海原の波間にかげはうきしづみつゝ
海上月　沖つ波なるとの海のはやしほにやどり定めぬ月の影かな
海上待月　山もなき青海原の波の上に待てどもおそし秋のよの月
月前松風　窓のうちにさし入る月のかげふけて軒端しづかに松風ぞ吹く
河水久澄　昔よりながれたえせぬ五十鈴川なほ萬代もすまむとぞ思ふ

明治十六年

鶯　このごろはかきねの柳のきの梅みな鶯のやどゝなりぬる
折梅　さかりなる庭のうめがえたをらせて人と共にもかざす今日かな

四月二十三日小金井に遠乘しける時花のもとにて

首夏水　春風のふきのまに〳〵雪とちる櫻の花のおもしろきかな
山新樹　夏あさき山下水をきてみればきのふの春の花ぞながるゝ
垣卯花　薄くこくみどりかさなる夏山の若葉のいろのなつかしきかな
夏草深　てすさびにさしゝ垣根の卯花もこの夏よりぞ咲きそめにける
夕立晴　夏草のしげり〳〵て岡のべの小松もわかずなりにけるかな
折にふれて　雲は晴れ風はのこりてゆふだちの過ぎしあとこそ涼しかりけれ
庭のおもは若葉しげりてすゞかけの花さく頃となりにけるかな

明治十六年

明治十六年

折にふれて　ときのまに千里かけらむ駒もがな紅の森にすゞみてをこむ

萩藏水　水の上に咲きなびきたり萩が花うつれる影も見えぬばかりに

月前露　くれわたる庭の芝生におく露のひかり見えゆく夕月のかげ

蟲　ふかゝらぬ庭の草にも蟲のねのきこゆる秋となりにけるかな

朝蟲　朝づく日つゆにかゞやく草村にのこりてもなく蟲のこゑかな

車中聞蟲　をぐるまのうちよりきけばなく蟲の聲をわけゆくこゝちこそすれ

雨後月　むらさめの雫もいまだおちやまぬ松のひまより月ぞさしくる

濱月　白波のよせてはかへる長濱のまさごぢとほく照らす月かな

雲間鴈　なきわたる鴈のつばさにかゝりけり月まつ山のゆふぐれのくも

霧埋山　ふじのねも見え渡なりにけりいづくまでたちのぼるらむ秋の夕ぎり

原霧　子日せし小松が原も夕霧のたなびく秋はさびしかりけり

菊契多秋　もろ人と共にかざゝむいく秋もまがきに匂へしら菊の花

庭前紅葉　松が枝にまじるもみぢの色ふかみ山べおぼゆる庭のおもかな

折にふれて　いさみたつ駒にくらおけ飛鳥山そめはじめたる紅葉みてこむ

山路落葉　嵐ふくやまぢをゆけば松の葉も紅葉と共にみだれてぞちる

庭雪　みな人のちからあはせて庭のおもにきづきあげたる雪のしら山

馬上雪　いさみたつ駒にうちのり吹上のにはの雪見にいでしけさかな

鴨場　みなびとの手ごとにもたる網のめをのがれかぬらむあはれ水鳥

明治十七年

庭鶯　我庭のうめの林のひろければよそにうつらぬ鶯のこゑ

山ふかく狩しけるをりにうぐひすのなくをきゝて

はるふかき山の林にきこゆなり今日をまちけむ鶯の聲

夏草深　いつのまに生ひしげるらむとのもりが刈らぬ日もなき庭の夏草

明治十七年

明治十七年

晴夜夏月　雲はれしこよひの月は玉だれのうちよりみるも涼しかりけり

夏のゆふべ月をまちて

あまつかぜこの村雲をふきはらへ涼しき月のかげもみるべく

夏の夜新殿の月を見て

夏夜待風　たかどの〻軒にさしいる月みれば風なきよはも涼しかりけり

夏旅　はしゐして風をまてどもくれたけの枝もうごかぬ夏のよはかな

月前露　旅衣あさたつ袖をふきかへす松風すゞし浮島が原

庭前蟲　雲もなく霧もか〻らぬ月かげを芝生の露にやどしてぞみる

野秋風　ゆふされば庭の草葉も露おきてはなたぬむしの聲ぞきこゆる

月　むさし野の千ぐさの花はちりすぎてすゝきにのこる秋の風かな

月前風　白川の關うちこえて見しかげもおもひぞいづるあきの夜の月

あまつ風ふきのまに〳〵雲はれて照りこそまされ秋の夜のつき

瀧邊月　いはまよりおちくる瀧の音すみて山かぜ寒しあきのよのつき

海上月　ひさかたの空にありながらわたつみの底まで照らす秋の夜の月

月前遠望　秋の夜の月の光にしら雲のあはも上總もみえわたるかな

馬場にて月を見て

遠山霧　駒ならす庭さやかなる月影にまがきの菊の花もみえつゝ

河上霧　朝日かげのぼるけしきはみえながらなほ霧ふかしをちの山のは

毎秋見菊　信濃なる河中島のあさ霧に昔の秋のおもかげぞたつ

池邊紅葉　秋ごとに匂ふしら菊もろ人と共にみるこそたのしかりけれ

月前殘菊　みる人のかげと共にも池水の底にうつれる岸のもみぢ葉

庭落葉　おく霜にうつろひそめし白菊をもとの色にもかへす月かな

島冬月　風ふけばおつるこのはに朝な〳〵はらふ庭ともみえぬころかな

すみなれて誰かみるらむ伊豆の海のおきの小島の冬のよの月

明治十七年

月照山雪　空はれて照りたる月に遠山の雪のひかりも見ゆるよはかな
晴天鶴　富士のねもはるかに見えてあしたづのたちまふ空そのどけかりける

明治十八年

窓前鶯　まどあけて見るとしらずや呉竹のしげみがなかに鶯のなく
花盛　春風もよきてふくかと思ふまでさかりのどけき花のかげかな
月前花　おぼろよの月も梢にさしいでゝにほひくはゝる花櫻かな
遠山花　春霞たなびく山はとほけれど雲ともみえぬ花の色かな
夕山吹　墨染のゆふべをぐらき池水になほ影みゆる山吹のはな
折にふれて　ゆふだちのはれゆく空にたつ虹をたちいでゝ見ぬ人なかりけり
朝顔　しばがきにまとひあまりて荻の葉の末にもさけり朝顔の花

あるをりに船中見紅葉といふことを

風後落葉　紅葉よりあかく見ゆるはふねのうちにつらなる臣のこゝろなりけり
庭落葉　ひとしきりさそひし風はしづまりておのがまに〳〵にちる紅葉かな
月照氷　あらしふく庭のもみぢ葉あさ霜のうへにちりたる色のさやけさ
禁園雪深　厚氷とぢたる池の底までもてりとほるかとみゆる月かな
雪中早梅　ゆきかひの道をぞ思ふわが園の草木もうづむけさのみゆきに
冬泉　ふりつもる梢の雪をはらはせて今朝こそ見つれ梅のはつ花
　　冬ふかき池のなかにもほとばしる水ひとすぢはこほらざりけり

明治十九年

新年望山　年のたつあしたに見ればふじのねの雪の光もあたらしきかな
毎年見梅　わがそのゝ梅の花見むこの春もこぞにかはらぬ人をつどへて
絲櫻　けさよりもまた咲きそひて春の日のながさしらるゝ絲櫻かな

明治十九年

夜花　ともしびの光をかりて窓の外の花もてあそぶよはの樂しさ
夜思花　さよふけて吹く松風のおとたかしこのまの櫻いまかちるらむ
池邊花　しづかなる池のこゝろも動くらむみぎはの花に風わたるなり
樓上見花　高殿にのぼりて見ればをちこちの花も今日こそ盛なりけれ
雨後殘花　春雨のはれまになりぬたちいでゝ散りのこりたる庭の花みむ
折にふれて　はるかぜにいなゝく駒の聲すなり花の下道たれかゆくらむ
竹間夏月　若竹のしげみもりくる月かげはくまなきよりも涼しかりけり
故郷薄　故郷のかきねのすゝきまねきてもかへらぬものは昔なりけり
蟲聲近枕　いづくにて鳴くともしらぬ蟲のねの枕はなれぬ秋のよはかな
月出山　粟田山くもふきはらふ松風のうへにいでたるあきの夜の月
待菊盛　みな人もまちわたるらむ我園にうゑたる菊の花のさかりを
庭霜　冬がれのにはのしばふは朝霜のおくも消ゆるもわかれざりけり

松上霜　千代ふべきみぎりの松はおくしもを寒きものとも思はざるらむ
冬夜寒　したさゆる冬のよどこにねざめして衾かさねぬ人をこそおもへ
綠竹年久　九重のうてなの竹のふかみどりかはらぬかげぞ久しかりける
庭上鶴　こゝのへのみぎりに馴れてすむたづの千代よぶ聲をきかぬ日ぞなき

明治二十年

窓前鶯　あさな〳〵なく鶯のこゑすなり窓のたかむら霜はおけども
月前梅　春のよのおぼろ月夜の影ふけて窓の内までかをる梅かな
夕蛙　つばくらめ飛ぶかげたえし小山田のゆふべさびしくなく蛙かな
野夏草　夏草も茂らざりけりものゝふの道おこたらずならし野の原
海上月　あしひきの山のはいづる月かげに大海原の波を見るかな
秋水鳥　秋風のさそふこの葉にさきだちて浮びそめたる池の水鳥

明治二十年

明治二十一・二・三年

池水涙靜　池水のうへにもしるしよもの海なみしづかなる年のはじめは

明治二十一年

雪埋松　海原はみどりにはれて濱松のこずゑさやかにふれる白雪

明治二十二年

水石契久　さゞれ石の巖とならむ末までも五十鈴の川の水はにごらじ

明治二十三年

京都の花を見て

ふるさとの花のさかりをきて見ればなく鶯のこゑもなつかし

京都をいでたゝむとするころ聽雪にて

わたどのゝ下ゆく水の音きくもこよひ一夜となりにけるかな

吳軍港にゆくとて四月十八日小豆島にふれをとゞめけるに

あくるあした霧のいと深くたちこめたればとて船をいださざりければ

思ひきや小豆のしまの朝霧にゆくさきみえずなりはてむとは

折にふれて　ふりつゞく雨の音きけばあづき島霧こめし日もおもほゆるかな

寄國祝　新玉のとしを迎へて萬民ひとつごゝろに國いはふらし

明治二十四年

述懷　千早ぶる神ぞ知るらむ民のため世をやすかれと祈る心は

社頭祈世　とこしへに民やすかれといのるなるわがよをまもれ伊勢のおほかみ

明治二十四年

明治二十五年

梅薫風

時すぎて散るも殘るも風ふけばひとしくかをる梅の花ぞの

折梅

咲きそめしかきねの梅の一枝をおみのためにと手折りつるかな

朝花

いづる日の光もそひて山ざくらまばゆく見ゆる花のいろかな

折りたる花の枝を

わがために枝をえらびて手折りけむ花の匂のふかくもあるかな

吹上の庭にて

のる駒の鞍のまへわにちりかゝる匂櫻の香こそたかけれ

小金井の櫻をおもひやりて

月前風

こがねゐの里ちかけれどこの春も人傳にきく花ざかりかな

むら雲を嶺のあらしにはらはせてさしのぼる月の影のさやけさ

月前神樂

すめがみの廣前てらす月かげに神樂のこゑもすみまさりつゝ

日出山

山のはにかゝれる雲もはれそめてのぼる朝日のかげのさやけさ

明治二十六年

秋風寒

宮のうちもふくかぜさむくなりにけり山べはいまや時雨ふるらむ

落葉浮水

魚はみな底にしづみてもみぢ葉のうかぶも寒し庭の池みづ

山冬月

やま松の霜ふきおとす木枯にさえこそまされ冬の夜の月

寒夜述懷

さゆる夜の嵐のおとに夢さめてしづがふせやを思ひやるかな

巖上龜

うごきなきあきつ島根のいはの上によろづよしめて龜はすむらむ

明治二十七年

鋼路鶯

逢坂のせきのふるみち春ゆけば杉生かすみて鶯ぞなく

故郷梅　すみしよの春なつかしきふるさとの梅のさかりを誰かみるらむ
月前螢　浮雲もはれたる空の月かげにかくるゝものは螢なりけり
蓮満池　いけみづは蓮の浮葉にうづもれて露のみひかるあさぼらけかな
水鳥　櫻田のほりちかければ水鳥のさわぐ羽音をきかぬ夜ぞなき
梅花先春　春風もふくこゝちしてあらたまの年の初日に匂ふうめかな
松上鶴　やまゝつのしげみがなかにきこゆなりいまだ巣だゝぬひな鶴のこゑ

明治二十八年

旅順の戰のさまをきゝて

世にたかくひゞきけるかな松樹山せめおとしつるかちどきの聲

明治二十九年

山霞　あま雲もいゆきはゞかる富士のねをおほふは春の霞なりけり
雨中鶯　つれ〴〵と雨のふる日はうぐひすも竹のはやしにこもりてぞ鳴く
曙鶯　花の色もまだみえそめぬ曙にいづくなるらむ鶯の啼く
朝鶯　あさ清めをはりにけらし窓ちかくなく鶯のこゑのきこゆる
梅花盛　むつまじく枝をかはしてさく梅もさかりあらそふ色はみえけり
故郷柳　故郷のかきねに今もなびくらむわがさしおきし青柳のいと
庭若草　こゝろして朝ぎよめせよ若草のはつかにもえし九重のには
山春月　夕霞たなびく空にほの〴〵と山のはみえていづる月かな
簾外春月　をすのとにいでゝ花みる人かげもおぼろにうつる春のよの月
霞中花　春がすみたちなかくしそ九重の内外へだてぬ花のさかりを
庭前花　吹く風ものどかなる世の春まちてわが庭櫻さきそめにけり
靜見花　よものうみ波をさまりてこの春は心のどかに花を見るかな

對花言志　散りやすきうらみはいはじいく春もかはらでにほへ山ざくら花
落花風　たますだれかゝぐる窓の朝風にわたどのかけてちる櫻かな
田家蛙　しづのをも門田のくろをゆづる世になにかしましく蛙なくらむ
春野　蟲のねをきゝし野末にきてみれば春さく花もちぐさなりけり
折にふれて　人みなの花をかざしてゆくみればわが世の春ものどけかりけり
梅雨欲晴　山の端の入日にかゝる雲もなしあすは晴れなむ梅雨のそら
月前螢　いけのおもは月にゆづりて蘆の葉のしげみがくれをゆく螢かな
沙上夏月　月清き庭のまさごぢふむ人のかげも涼しくうつるよはかな
行路夏草　夏草のしげきをみればあらたよにいまだひらけぬ道もありけり
鵜川　かゞり火の光にみれば長良川うの羽の色もさやけかりけり
蚊遣火　蚊遣たくしづがわらやのいぶせさも空にしられてたつけぶりかな
折にふれて　手もたゆくならす扇にまねかれてまことの風もふくゆふべかな

田家朝顔　なか〳〵に色こそよけれつくろはぬしづが垣根の朝顔のはな
月前蟲　さやかなる月夜の庭のきりぐ〵すいづこのくまにかくれてか鳴く
終夜聞蟲　よもすがら鳴きもたゆまぬ蟲のねにわれもねぶらであかしつるかな
月　としぐ〵に光そひてもみゆるかなやまとしまねの秋のよの月
中秋月　心にもかゝる雲なきこの秋のもなかの月のかげのさやけさ
月前風　はらふべき雲ものこらぬ大空の月にふくなりよはの秋風
深夜月　高殿のうへまで松の影みえて月はひきくもなれるよはかな
都月　このまよりさしのぼりけり山遠きみやこの空の秋のよのつき
社頭月　ちはやぶる神路の山にてる月のひかりぞ國のかゞみなりける
寄菊祝　わたつみのほかまでにほへ國の風ふきそふ秋のしらぎくの花
紅葉映日　夕日影てらすをみればをぐら山まつよりおくも紅葉なりけり
曉冬月　霜のうへにうつる枯木の影きえていまはとしらむ在明の月

山雪　夏だにも風さむかりし二荒山いくへか雪のふりつもるらむ
海上船　戰にかちてかへりしいくさ船けふもかゝれりしながはの沖
寄山祝　天の下にぎはふ世こそたのしけれ山のおくまで道のひらけて
寄海祝　西の海なみをさまりてもゝち船ゆきかふ世こそ樂しかりけれ

明治三十年

海邊霞　松がねをあらひし波の音たえていそべのどかにたつ霞かな
山家餘寒　雪きえぬ山里人は冬よりも春の寒さやしのぎかぬらむ
梅薫風　しもがれの草木もかをるこゝちして梅さく庭に春風ぞふく
雨中春草　春雨にみどりはそひて見えながらいまだみじかし野べの若草
絲櫻　のきばふく風にみだれておばしまのうへまでかゝる絲櫻かな
松間花　こがくれて咲くとはすれど松風のふくたびにちる山ざくらかな
花似雲　たかゝらぬ松のこのまにさきながら雲かとみゆる山櫻かな
春海　釣舟も同じ處につらなりてのどかにみゆる春のうみかな
庭前蟲　とのもりの露をはらひし朝庭に猶夜をのこす蟲の聲かな
山鹿　月もいまのぼらむとする山のはにたかくきこゆるさを鹿の聲
折にふれて　蟲の聲しづまりにけりとのもりの朝ぎよめする時やきぬらむ
落葉風　あまたたびしぐれて染めしもみぢ葉をたゞひと風のちらしけるかな
雨中落葉　山かぜの音すさまじきゆふぐれに雨もまじりてちる木の葉かな
連山雪　高殿のをすまきあげて見わたせばいづくの山も雪ぞつもれる
埋火　まどたゝく夜嵐さむし埋火のうへにも霜のちるこゝちして
冬鳥　南天の實をあさるとやひえ鳥の寒きかきねをたちもはなれぬ
朝望山　ひむかしの海よりいでゝふじのねの雪にてりそふ朝日かげかな

明治三十一年

曙鶯　ほの〴〵とあけゆく庭にさく花のかげみえそめて鶯のなく

雨中若草　花の色もおよばぬものは春雨にぬれたる草の緑なりけり

雲雀　里の子も翅あらばと思ふらむあがる雲雀の影を仰ぎて

雨中落花　春雨のふる日しづけき庭の面にひとりみだれてちる櫻かな

雨後落花　はるさめのなごりの風にやへ櫻はなぶさながら散るもありけり

池杜若　かきつばたにほへる池はかけわたす橋こそ花のたえまなりけれ

橋邊藤　濱殿の入江の橋はさく藤の波をくゞりて渡るなりけり

藤懸松　棚ゆひてほかにうつさむ藤の花かゝれる松はいたく老いたり

折にふれて　わが國の櫻のかげに咲きいでゝ色こそはえねからもゝの花

梅雨　さみだれの音のみきゝてくらす日は宮の内だにいぶせかりけり

梅雨雲　軒ちかく雲たちこめて山里にすむこゝちする梅雨のころ

河梅雨　つくばねは雲にかくれて利根川の瀬の音たかしさみだれの頃

夏月　里とほき山田の早苗うゑはてゝかへる月夜やすゞしかるらむ

夏曉月　あさがほの花の色なる大空にのこるもすゞしありあけの月

瞿麥　月に日にさきそふみえて樂しきはわがしきしまのやまとなでしこ

折にふれて　はしねして水鷄きかむと思ふ夜にかしましきまでなく蛙かな

風前草花　露をのみはらふとおもひし夕風にちりそめにけり秋萩の花

蟲聲非一　をちこちの野山のむしもはなたれて鳴くねくらぶる園の内かな

旅中鹿　故郷の春日の野邊にたびねして夜たゞをしかの聲をきくかな

待月　人みなの月まつ夜なり大空の雲ふきはらへ秋のやま風

河上月　宇治川の河上とほく霧はれていはまのみちも見ゆる月かな

澤月　鳴のたつおとはきこえて山澤のみぎはしづけきありあけの月

苔上月　霧はれし山のこのまをもる月にぬれたる苔の色もみえつゝ

樓上見月　たかどのゝすだれまかせて海ごしの山よりのぼる月を見るかな

月前言志　あきらけき月にむかへば久方の空もしたしくおもほゆるかな

雁聲近　霧はらふ翅のおともきくばかりまぢかき空をわたるかりがね

月前菊　大空の星はかくるゝ月影に菊のはなのみ見ゆるよはかな

庭前菊　しら菊の花さきみちてあしたづの羽風もかをる園のうちかな

折にふれて　山里の秋もかくやとおもふまでのきばしづかにすめる月かな

池龜　池水のうきものしたにすむ龜もいでゝせをほす春ののどけさ

名所湖　岩根ふみのぼりてみれば二荒山ふねをうかぶるうみもありけり

櫻井里　子わかれの松のしづくに袖ぬれて昔をしのぶさくらゐの里

折にふれて　松風のおとのみきゝて年も經ぬいつかゆきみむ天のはしだて

霞中鶯　わが園のうちとはきけどおぼつかな霞がくれのうぐひすの聲

杜鶯　椿ちるもりのしたみち春雨にぬれつゝゆけば鶯のなく

庭若草　蓬とも菊ともわかず春の日のいまだみじかき庭の若草

月前落花　そでのうへに散りくる花もみえぬまでかすみはてたる春のよの月

落花風　ちりやすき一重櫻の花のうへに風さへそひてそゝぐ雨かな

水上落花　池のおもにのぞめる花のうれしきはちりても水に浮ぶなりけり

池落花　池水にちりうく花のかたよりてひれふる鯉のかげも見えつゝ

春山　山はみな緑になりてふじのねのほかには雪もみえぬ春かな

花落枝緑　おそくとくさきし櫻もちりはてゝひとつ青葉となれる庭かな

庭瞿麥　からやまと色をまじへて咲きにけりひろきそのふの撫子の花

夜納涼　ともしびを軒端にかけて涼む夜は月おそしとも思はざりけり
夏蝶　咲きしよりはなれぬみれば常夏の花のあるじは胡蝶なるらむ
折にふれて　夏さむき越の山路をさみだれにぬれてこえしも昔なりけり
沙上月　月白きまさごにうつる濱松のかげはさながら墨繪なりけり
風前鷹　野分だつゆふべの空にきこゆなりみだれてわたる初雁の聲
菊薫風　九重のまがきのうちにさく菊も風のまに〳〵世にかをるらむ
折にふれて　はまどの〻入江のあしま汐みちておばしまちかく月ぞうかべる
月前落葉　木枯のふきたつ庭にさす月のくまとなりても散るこのはかな
氷始結　もみぢ葉もいまだしづまぬ池水にむすびそめたる薄氷かな
水鳥馴　殿もりのゆき〻に馴れてわが庭の池の水鳥たゝむともせぬ
雪　いたゞきは雲にかくれてふじのねの裾野ましろにつもる雪かな
山家雪　ふきおろす嶺のあらしに山里はきのふの雪ぞけふもちりくる

夜埋火　月のさす窓をもとぢて冬の夜は埋火にのみうちむかひつゝ
田に烟　小山田のさとのけぶりもとしゞにたちそふ世こそ樂しかりけれ
池邊鷺　位ある身をわすれてや池のおもの鷺はあしまの魚ねらふらむ

明治三十三年

田春雨　しづのをがかへす山田もうるほひてゆふべしづかに春雨ぞふる
軒橘　軒ちかき花たちばなにふる里の南の殿をおもひこそやれ
瞿麥露　をしへある庭にさきたる撫子の花は露にもみだれざりけり
夏朝　撫子の花のうへしろく露みえてあけゆく庭ぞすゞしかりける
山月　しらぬまに山のは高くなりにけり雲のうちなる秋のよの月
庭月　秋の田のいなばのうへを思ふかな庭の芝生をてらす月夜に
秋眺望　秋風にはこねあしがら雲はれてはつ雪しろしふじの遠やま

寒夜衾　しろたへの衾も雪のこゝちしてうちかさぬれど寒きよはかな
月前千鳥　磯山をはなるゝ月に聲をのみきゝし千鳥のかげもみえつゝ
月照雪　冬のよのはれたるそらの月かげにきのふつもりし雪を見るかな
猿　梢よりこずゑをつたふこのは猿つばさあるかと思はるゝかな
松上鶴　風の音はしづまりはてゝ千代よばふたづがねたかしみねのまつ原
寄鶴祝　ひさかたの雲居のにはにすむ鶴のにひ巣つくらむ時ぞまたるゝ

明治三十四年

花盛　はなざかり賑ふころは玉桙の道もる人やいとなかるらむ
遅櫻　春寒き山したみちの櫻花おくれたりともしらで咲くらむ
折にふれて　ちり殘る花まだおほし今ひと日いでゝ遊ばむ春のそのふに
芍藥　うつくしく匂ふ籬のえびす草なつかしき名をおほせてしがな

池梅雨　すむ魚もいぶせかるらむ池水の浮藻しげりてさみだれのふる
池蓮　茂れどもいぶせからぬはいけ水にうかべる蓮のひろ葉なりけり
夏旅　夏しらぬやまべをさしてゆく旅も道の暑さの堪へがたきかな
折にふれて　民のため年ある秋をいのる身はたへぬあつさも厭はざりけり
蟲　あきのよの月はこのまにかたぶきてくらき垣根に蟲のねぞする
旅宿蟲　わがためにあつめしならむ草枕たびのやどりの松むしのこゑ
水邊月　秋風に柳のかれ葉ちりうきて水の上寒くすめる月かな
月前遠情　はれわたる空にむかひて思ふかな新高山の月はいかにと
雪中竹　このうへにいくへふりそふ雪ならむたかむら高くなりまさりつゝ
車中見雪　嶺たかくつらなる山に雪見えて車のうちもさゆる今日かな
埋火　埋火にうちむかひても霜をふむ人の寒さを思ふよはかな
冬眺望　笹原も小松がはらも霜ふりて枯野まばゆく朝日さすなり

故郷池　ふる里のにはの池水昔わが放ちし龜はいまもすむらむ
旅行　旅やかたところかはれどわれをまつ民の心はひとつなりけり
漁舟　はまどのゝ庭のものともみゆるかな芝のうらわにうかぶつり舟
海邊眺望　高殿に身はありながらあま小舟うかぶ波間にゆく心かな
神祇　ちはやぶる神のこゝろを心にてわが國民を治めてしがな

明治三十五年

車中見梅　人をして後に折らせむ小車のすぐる野道に梅のさきたる
土筆　庭のおもの芝生がなかにつく〳〵し植ゑたるごとくおひいでにけり
故郷花　ふるさとの軒端のさくらこの春もわれを待ちてやひとりさくらむ
思遠花　あらしやま花のさかりを人づてにきゝてことしの春もすぎにき
花のころに　旅衣こゝろかろくもたちいでゝ花にあそぶは樂しかるらむ

池落花　池みづにちりてうかべる花をまたたゞよはしても春風ぞふく
故郷橘　ふるさとの花橘を夏ごとに千代田の宮におもひやるかな
夏遠情　夏の夜の月のかつらのなり所すゞしき風のいかにふくらむ
折にふれて　たかどのゝ内もあつさにたへぬ日にしづがふせやを思ひこそやれ
月を見て　世をおもふ心の雲もうちはれてこよひさやけき月をみるかな
月夜聞鶴　あしたづのなく聲すみてふけにけり千代田の宮の秋のよの月
野分　九重のにはも野分にあれにけりしづがふせやはいかにかあるらむ
秋祝　ことしげきこの秋にしも千町田のみのりよろしと聞くが嬉しさ
折にふれて　小山田のをしねかるべくなりぬらむ庭の薄もほにいでにけり
　故郷の高雄の紅葉ちかゝらば折りとらせてもみてましものを
冬神祇　ゆたかなる年の初穂をさゝげつゝしづもあがたの神祭るらむ
折にふれて　冬がれの芝生の堇さきにけり小春の日影さしわたりつゝ

折にふれて

埋火にむかへど寒しふる雪のしたにうもれし人を思へば

かきくらしみゆきふるなりつはものゝ野べの屯やいかにさゆらむ

薄暮山

あかねさす夕日のかげは入りはてゝ空にのこれる富士のとほ山

旅

くにたみのつらなる道をかつみつゝ旅にいづるがたのしかりけり

國民のおくりむかへて行くところさびしさ知らぬ鄙の長みち

旅中山

心ゆく旅路なりけり大空にはれたるふじの山もみえつゝ

羇中橋

遠くとも渡りてゆかむわが爲にかけたりときく野路の川橋

風前鳥

大空に風のふきあげし木の葉かと思ふばかりにとぶ小鳥かな

鴉

山かぜにふき亂されてたつ鳥のうは毛ちりくる森のしたみち

馬

やどるべき木立多かる森にてもねぐら爭ふむら鳥かな

騎兵

のる人の心をはやくしる駒はものいふよりもあはれなりけり

勇みたつ駒をひかへて進めてふ聲やまつらむつはものゝとも

机

さまぐゝの書のつどひてけふもまた机のうへのせばくなりぬる

海上眺望

わたのはら汐ぞみつらし波の上に浮ぶ小島のひきくなりぬる

流懐

曉のねざめしづかに思ふかなわがまつりごといかゞあらむと

湊川懐古

あた波をふせぎし人はみなと川神となりてぞ世を守るらむ

社頭松風

神垣のみしめゆらぎて加茂山の松の梢にあさかぜぞ吹く

神祇

やすからむ世をこそいのれ天つ神くにつ社に幣をたむけて

ちはやぶる神のまもりによりてこそわが葦原のくにはやすけれ

千萬の神もひとつにまもるらむ青人草のしげりゆく世を

寄道祝

千早ぶる神のひらきし敷島の道はさかえむ萬代までに

長雨ふりけるころ

はれまなき雨につけても思ふかなことしの秋のみのりいかにと

演習地にて

ものゝふのせめたゝかひし田原坂まつも老木となりにけるかな

折にふれて　つはものと共に野山をわけてみむ手馴の駒にくらをおかせて
梓弓やしまのほかも波風のしづかなる世をわがいのるかな

明治三十六年

春駒　はなちたる牧の若こまいづれをかわが厩にはひかむとすらむ
花始開　春毎にうれしきものは咲く花にはじめてむかふあしたなりけり
旅中花　野も山も花のさかりになる時をうれしく旅にいでにけるかな
月前蛙　夕月夜にほひそめたる池水にかしましからずなく蛙かな
春島　船ならでゆきかひすべく見ゆるかな霞に浮ぶあはぢ島山
春祝　のどかなる春にあひたる國民はおなじ心に花や見るらむ
折にふれて　旅衣たちいでぬまに九重のにはのさくらよさかりみせなむ
のどかにも旗手なびきていくさ船つらなる沖のかすみはれたり
故郷夏月　ひがしやまのぼる月みしふるさとのすゞみ殿こそこひしかりけれ
夏日　吹上の瀧にてる日のかゞやきて水さへあつく見ゆるけふかな
夏風　文机のふみはちれどもふく風のすゞしき窓はさゝれざりけり
田家夏　ゆあみせむ時も忘れてしづのをはくれゆく畑に瓜やとるらむ
夏氷　かたはらにおける氷のきゆるにも道ゆく人のあつさをぞおもふ
折にふれて　たへがたきこの日ざかりにおもふかな高砂島のあつさいかにと
初秋蟲　夏よりも暑き日なりと思ひしをくるれば庭に蟲ぞなくなる
雨中萩　するまではまだささきみたぬ秋はぎの花うちみだり村雨ぞふる
禁庭萩　昔わが折りてあそびしはぎの戸の花もこのごろさかりなるらむ
川秋風　大堰川さくらの紅葉ちりうきてゐせきの波に秋風ぞ吹く
秋雨　あやにくに秋のながめのはれぬかなをしねかりほす頃ぞと思ふに
待月　のぼるべき山には雲もかゝらぬをまつほどひさし秋の夜の月

見月　あかずして月みる窓をとざしけり寒くなりぬと人にいはれて

秋月明　ともしびをかゝげぬ方に來てみればいよ〳〵あかし秋の夜の月

兵營月　いくさ歌うたひかはしてつはものもたむろのにはに月やみるらむ

月前松　秋ごとにかはらぬ月ぞやどりける千代田の宮の松のこずゑに

月似古　いにしへの人のことばもうたひけりそのよに似たる月にむかひて

秋色　茸狩のかへさに見れば山がつが垣根の柚の實いろづきにけり

雪中待人　ふりつもる雪わけがたくなりぬらむまゐらむといひし人のおそきは

雪のふりける日

折に觸れて　吳竹の夜ひとよふらばいかならむ見るまに高くつもるしら雪

風　豊年の新嘗祭ことなくてつかふる今日ぞうれしかりける

夕　久方のむなしき空にふく風も物にふれてぞ聲はたてける

夕月夜さやかになりてふみならす庭木のかげはくれはてにけり

山　ふく風のおともきこえぬ遠山はたゞうつしゑのこゝちこそすれ

原行人　人あまたゐてだに旅はさびしきを荒野の原をひとりゆくらむ

田　にひばりの田づら多くも見ゆるかないそしむ民のちからしられて

道　千早ぶる神のひらきし道をまたひらくは人のちからなりけり

水　あらがねの土の下樋をかよひきて都にすめる多摩川のみづ

晴後遠水　器にはしたがひながらいはがねもとほすは水のちからなりけり

故郷　あま雲はあらしにはれて山川の水上たかく見ゆるけさかな

故郷井　年をへてかへりてみれば故郷のみやもる人もおいにけるかな

故郷松　わがために汲みつときゝし祐の井の水はいまなほなつかしきかな

故郷情　ふる里をとひてし人に問ひて見むわがうゑおきし松はいかにと

旅中情　老人のかたりしことをさらにまた思ひぞいづるふる里にきて

草まくら旅にいでゝは思ふかな民のなりはひさまたげむかと

旅宿雞　とのゐ人いま參るらむ草まくら旅のやどりに鷄のなく
旅宿夢　まぢかくもたづねし民のなりはひをこよひ旅ねの夢にみしかな
羇中馬　小車のあとさき守るますらをの駒もつかれむ鄙の長みち
山家門　杉垣をめぐりてみれば山里はおもはぬかたに門ぞありける
埋木　うもれ木をみるにつけても思ふかなしづめるまゝの人もありやと
詞　ことのはの道のおくまでふみわけむ政きくいとま〳〵に
盃　盃をけふもさづけつ位山はじめてのぼる人をいはひて
とし高き人にさづくる盃は手にとるごとにうれしかりけり
布　年たかき人の手づから織りいでしぬのは錦におとらざりけり
寫眞　旅にしてみし海山のけしきをもこのうつしゑに思ひいでつゝ
軍艦　すゝめてふ旗につれつゝいくさ船かろくも動く浪のうへかな
いくさぶねつらなる沖をみわたせば波のひゞきもいさましきかな

軍港　軍ぶね造る所もみてゆかむ吳の港にしばしとまりて
網引　あびきしてわれに見むせとあま小舟海もせにこそこぎつらねけれ
燈　ともし火の影まばらにもみゆるかな人すむべくもあらぬ山邊に
山眺望　波の音はきこえぬ山の高嶺より青海原をひとめにぞみる
述懷　千早ぶる神のかためしわが國を民と共にも守らざらめや
ひとり身をかへりみるかなまつりごとたすくる人はあまたあれども
寄風述懷　ひさかたの空吹く風よひとみなの心のちりを拂ひすてなむ
翁　うまごにやたすけられつゝいでつらむわれを迎へてたてる老人
親　老の坂こえぬる子をもをさなしと思ふやおやのこゝろなるらむ
子　ずなほにもおほしたてなむいづれにもかたぶきやすき庭のわか竹
友　もてあそび手にとらすれば幼子がうちゑむ顏のうつくしきかな
もろともにたすけかはしてむつびあふ友ぞ世にたつ力なるべき

卒業式

わらはべがまなびの道のゆるし文さづくる人もうれしかるらむ

披書知昔

文みれば昔にあへるこゝちして涙もよほす時もありけり

思往事

をり〳〵におもひぞいづる國のため心くだきし人のむかしを

社頭

はるかにもあふがぬ日なしわが國のしづめとたてる伊勢のかみ垣

神祇

わがこゝろおよばぬ國のはてまでもよるひる神は守りますらむ

折にふれて

つはものゝ駒の足音ぞきこゆなる旅だちまうけとゝのひぬらし

勇みたつこまをひかへてますらをはわが小車のいづるまちけむ

ことしげき世にふる人もわがこのむ道にわけいるひまはありけり

民のため心のやすむ時ぞなき身は九重の内にありても

天てらす神のみいつを仰ぐかなひらけゆく世にあふにつけても

月の輪のみさゝぎまうでする袖に松の古葉もちりかゝりつゝ

明治三十七年

新年

神風の伊勢の宮居の事をまづ今年も物の始にぞきく

新年祝

あしはらの國のさかえを祈るかな神代ながらのとしをむかへて

早春夕

ながしとはいまだ思はぬ春の日もくれがた遲くなりにけるかな

待鶯

思ふこと多きことしも鶯の聲はさすがにまたれぬるかな

雨中鶯

春雨にぬれたる花を見る人もなしとやひとり鶯のなく

梅花

おりたちて見るいとまなき春としもしらでや梅のさき匂ふらむ

梅風

吹上の園生の梅や咲きぬらむついぢふきこす風かをるなり

春草

さゞれ石敷きたる庭も若草のみどりになりぬ春たけぬらし

春雨

春雨のふるにつけても民草のうるほはむ世をまづ思ふかな

春駒

たゝかひのにはまだしらぬ若駒も勇みまさりてみゆる春かな

雉思子　子を思ふきゞすの聲をあはれとは狩をたのしむ人もきくらむ
雨夜思花　春雨のふりいでざらば花の上に月もさすべきよはならましを
樹間花　こずゑのみ人に知られて櫻花こがくれながら散りやはつらむ
見花　戰のにはに立つ身をいかにぞと思へば花もみるこゝちせず
對花思昔　春毎にうたげのにはにつらなりし人をぞおもふ花陰にして
花慰老　老人もゑみさかえつゝ咲きにほふ花の木陰に遊ぶ春かな
雨後落花　雨晴れし庭の木陰にたゝずめばぬれたる花の袖にちりくる
河上落花　大堰川いかだの過ぎし跡見えてちりうく花のたちわかれたる
暮春　吹上のそのふの花をいかにぞと問ふ日もなくて春のくれゆく
春日　こと繁き世のまつりごと聽くほどに春の日影も傾きにけり
春夜　ともしびもさしかへぬまに春の夜はよひすぎたりと人のいふなり
折にふれて　月影はかつみえながら春雨のしづくぞおつる花のしたみち

世の爲にもの思ふ時は庭にさく花も心にとまらざりけり
花鳥のいろねは常にかはらねどこゝろにとむる人なかりけり
はなとりの上も思はでよろづ民くにゝ心をつくす春かな
山ざくら見つゝぞおもふものゝふの心の花もさかりなる世を
思ふ事たえぬ今年は春の夜もねざめがちにてあかしけるかな
新樹露　この朝けひとむらさめや降りつらむ樅のわかばに露のたまれる
時鳥　時鳥おほかる里にあらねどもきかで過しゝ夏なかりけり
夜時鳥　こがひするしづや聞くらむ短夜のふけゆく空になく時鳥
山時鳥　時鳥きく人もなき山にしもかへりて聲を惜まざりけり
故宮橘　たらちねのみおやの御代をしのぶかな花橘の陰をふみつゝ
紫陽花　うるはしき色に匂へど何となくさびしく見ゆるあぢさゐのはな
海邊夏月　濱殿の庭の眞砂路ふみならし波間すゞしき月をみるかな

高樓夏月　おばしまは夜露にぬれて高殿の軒にさし入る月のすゞしさ

瞿麥　色々に咲きかはりけりおなじ種まきて育てし撫子の花

夏菊　おく霜の寒さを知らぬ夏菊の花もうつろふ時はのがれず

夏草　事繁き世にも似たるか夏草は拂ふあとよりおひ茂りつゝ

庭泉　庭の面に清水の音はきこゆれどむすぶいとまもなき今年かな

夏星　おほぞらの星をかぞへて夏の夜は月なき宵もはしるをぞする

夏山水　年々におもひやれども山水を汲みて遊ばむ夏なかりけり

夏住居　たちつゞく市の家居は暑からむ風の吹入る窓せばくして

夏駒　吹く風もたえず通ひて夏はたゞ高き所ぞすみよかりける

夏花　ゆふ日影かげろふ待ちて鞍おかむ駒もあつさに弱りもぞする

夏氷　百日さく花まばゆくもみゆるかな今や暑さのさかりなるらむ

夏しらぬこほり水をばいくさ人つどへるにはにわかちてしがな

夏神祇　折にふれて　わせおくて殘るかたなくうゑはでゝしづは田中の神まつるらし

早苗とるしづが菅笠いにしへの手ぶりおぼえてなつかしきかな

暑しともいはれざりけりにえかへる水田にたてるしづを思へば

たへがたき暑さにつけていたでおふ人のうへこそ思ひやらるれ

千萬のあたをおそれぬますらをもこの暑さには堪へずやあるらむ

ときのまに硯の水のかわくにもけふのあつさのしられけるかな

ものゝふの野邊のたむろやあつからむ宮の内にも風をまつ日は

いくさ人いかなるのべにあかすらむ蚊の聲しげくなれる夜ごろを

つはものはいかに暑さを凌ぐらむ水にともしといふところにて

朝顔　夕月の影にかぞへし莟より多く咲きけり朝がほの花

霧中朝顔　薄霧のなびくかきねに朝顔の花見えそめて夜はあけにけり

行路萩　ゆく人を妨げざらばたちとまり見てましものを野邊の秋萩

草花　秋の野のちぐさの花にくらぶれば染めなす色は限ありけり

故郷草花　園守やひとりみるらむ昔わが集めし庭の秋草の花

蟲聲非一　あきの野のちぐさの花の色々を聲にうつして蟲ぞなくなる

秋風寒　ふじの嶺に初雪みえてうちひさす都も寒き秋風ぞ吹く

秋夕雨　深からぬあきだに物のさびしきは雨に暮行くゆふべなりけり

故郷秋夕　守る人の住むばかりなる故郷のあきのゆふべやさびしかるらむ

秋夜閑談　いにしへの人の功を語りいでぬもの靜かなる秋の長夜に

秋田　八束穂のたりほのはつほ新嘗にさゝげまつると刈りはじむらむ

秋夜對月　たゝかひのにはに心をやりながらむかひふかしつ秋のよの月

月照流水　秋はぎのさきかくしたる遣水の末こそみゆれ月の光に

湖月　殿守やひとり見るらむ玉くしげ箱根の海の秋の夜のつき

海上月　あたの船うちしりぞけていくさびと大海原の月やみるらむ

田家月　綿の實も露にしめりて山畑のあぜ道寒し秋のよの月

月前遠情　もろこしの荒野の末のありさまを思ひやりても月をみるかな

旅宿月　都にておもひしよりもおもしろしあがたの里の秋の夜の月

行路霧　たびねする宿の軒端のあさければ枕の上に月のさし來る

折菊　霧たちてさだかに見えず道のべにわれを迎ふる人のおもわも

紅葉淺深　九重の庭の白菊たをらせて宴にもれし人におくらむ

河紅葉　こき薄き色をまじへてもみぢ葉はそめはてぬ間ぞ盛なりける

秋河　大堰川ゐせきの波にうつろひてちらぬ紅葉の影ぞたゞよふ

秋別業　西山は緑に晴れて桂川すみたる水に秋風ぞ吹く

秋遠情　てる月の桂の里のなり所秋こそゆきて見まくほしけれ

寄露述懷　園のうちにうゑたる稲も色づきぬ里人いまか山田刈るらむ

あがたもる人に問ひみむ民くさにかゝる惠の露はいかにと

秋神祇

神垣に使をたてゝ豊年の秋の初穂を捧げつるかな

秋祝

すめ神にはつほさゝげて國民と共に年ある秋を祝はむ

折にふれて

はりまがた舞子の濱に旅寐して見し夜こひしき月の影かな

霜

ものゝふの野邊のかりふしいかにぞと思ひやらるゝよはの霜かな

水鳥

朝日さす堤にいでゝ水鳥は霜にぬれたる翅ほすらし

雨中水鳥

ふる雨は霙になりて暮渡る入江に寒き水鳥の聲

雪朝

ふりつもる雪のあしたも司人まゐ來る時はたがへざりけり

年欲暮

まつり事いよ〳〵しげくなりにけり年の終の近づきしより

煤拂

ちはやぶる神のおましをはじめにて今年の塵を拂はせてけり

折にふれて

いたでおふ人のみとりに心せよにはかに風のさむくなりぬる

時雨ふる頃ともなりぬいくさ人暑さいかにと思ひやるまに

しぐれして寒き朝かな軍人すゝむ山路は雪やふるらむ

天

寐覺してまづこそ思へつはものゝたむろの寒さいかゞあらむと

星

あさみどり澄みわたりたる大空の廣きをおのが心ともがな

民戸煙

久方のあまつ空にも浮雲のまよはぬ日こそすくなかりけれ

塵

ゆふやけの雲うすらぎてたゞひとつあらはれそめし星の影かな

曉

事有るにつけていよ〳〵思ふかな民のかまどの煙いかにと

朝

つもりなば拂ふ方なくなりぬべし塵ばかりなる事とおもへど

地

ねざめせしこの曉のこゝろもてしづかにものを思ひ定めむ

峯

起き出でゝ思ふ事なきあしたこそをさな心にひとしかりけれ

野

產みなさぬものなしといふあらがねのつちはこの世の母にぞありける

道

おほぞらにそびえて見ゆるたかねにも登ればのぼる道はありけり

花紅葉なほうゑそへよ里人の遊び處と野はなりにけり

遠くとも人のゆくべき道ゆかば危き事はあらじとぞ思ふ

道　ひらくれば開くるまゝに思ふかなあらぬ道にや人のいらむと

山路　いはがねのこゞしき山をてる日にもたゆまずこゆるわが軍人
今もなほふみわけがたき深山路を開きし人の昔をぞ思ふ

岩　天地のなしのまゝなるいはがねの姿はことにおもしろきかな

瀧　岩がねにせかれざりせば瀧つ瀬の水のひゞきも世にはきこえじ

瀬　さゞれさへゆくこゝちして山川のあさせの水の早くもあるかな

海　仇波のしづまりはてゝ四方のうみのどかにならむ世をいのるかな

島　つかさどる人の力によりてこそたかさご島もひらけゆきけれ

磯波　岩が根によせて碎くる荒波のしぶきにくもるいそのまつ原

國　ちはやぶる神の御代よりうけつげる國をおろそかに守るべしやは

都　山城のみやこいかにと春秋の花に紅葉におもひやりつゝ

思古宮　さくらさく春なほ寒しみよし野の吉野の宮の昔おもへば

故郷松　故郷の庭の老松たらちねのみおやの御代の昔かたらへ

思故郷　たらちねのみおやのましゝ故郷の都はことにこひしかりけり
をさなくて住みし昔のありさまを折にふれては思ひいでつゝ

農家　しづがすむわらやのさまを見てぞ思ふ雨風あらき時はいかにと

庭　なか〳〵にみやびすくなしあまりにも作りすぎたる庭のけしきは

植物苑　我園にしげりあひけり外國の草木の苗もおほしたつれば

古井　くむ人もたえし野中のふるゐにはかへりて清き水やわくらむ

旅夕　あとさきに人をともなふ旅ながらくれゆく道はさびしかりけり

旅行友　故郷を遠くはなれてゆく人はともなふひとや力なるらむ

野外旅宿　しづのをが聲をまぢかくきゝてけり畑つゞきなる野べにやどりて

旅宿人來　あがた人かはる〴〵もつどひ來て旅のやかたは賑ひにけり

旅宿興　里人も花火うちあげて旅寐するわがつれ〴〵を慰めにけり

山家鳥

あしひきの山下庵はしづかにてかはぬ小鳥も庭になれつゝ

田家竹

おのづからおひたる竹をへだてにて垣根もゆはぬ小山田のさと

田家翁

こらは皆軍のにはにいではてゝ翁やひとり山田もるらむ

草

いぶせしと思ふなかにもえらびなばくすりとならむ草もあるべし

竹

むらぎもの心むなしき呉竹はしらず〳〵や千年へぬらむ

老松

やしなひてなほも齢をたもたせむ庭にちよふる松のひともと

巌上松

苦むせるいはねの松の萬代もうごきなき世は神ぞもるらむ

松年久

ふる里の老木の松はをさなくてみし世ながらの縁なりけり

籠中鳥

籠のうちにさへづる鳥の聲きけば放たまほしく思ひなりぬる

鶴

ひなづるは親とひとしくなりにけり巣だちし年は遠からねども

馬

足なみのかはるをみればのる人のこゝろを早くこまはしるらむ

牛

あしひきの山田のすゑのなはて道ひきつゞきても牛のゆくみゆ

龍

身にあまる重荷車をひきながらいそがぬ牛はつまづかずして

薬

つはものかてもまぐさも運ぶらむ牛も軍の道につかへて

書

わたなかに潜めるたつも大空の雲をおこさむ時はあるものを

讀書

國のためながゝれと思ふ老人にしなぬ薬をさづけてしがな

歌

いかならむ薬あたへて國のためいたでおひたる人をすくはむ

心ある人のいさめのことのはは病なき身の薬なりけり

筆とりてをしへし人の昔まで思ひうかぶる水莖のあと

文字をのみよみならひつゝ讀む書の心をえたる人ぞすくなき

いまの世におもひくらべて石上ふりにしふみを讀むぞたのしき

わがためにいひしことさへ思ひいでぬ昔の人のふみをよみつゝ

天地もうごかすばかり言の葉のまことの道をきはめてしがな

思ふことありのまに〳〵つらぬるがいとまなき世のなぐさめにして

歌

ときにつけ折にふれつゝ思ふことのぶればやがて歌とこそなれ
世の中にことあるときはみな人もまことの歌をよみいでにけり

軍歌

武士のいさむ心はいくさうたうたふ聲にもきゝしられけり

軍旗

ますらをに旗をさづけていのるかな日の本の名をかゞやかすべく

圖

ひとひらの地圖ひらきみてつはもののすゝむ山路を思ひやるかな

剣

しきしまの大和心をみがゝずば劍おぶともかひなからまし
あらはさむときはきにけりますらをがとぎし劍の清き光を
打ちさしてまもりながらにほどふるはいかなる手をか思ひめぐらす

琴

石上ふるきてぶりぞなつかしきしらぶる琴のこゑをきくにも

寶

あしはらの國とまさむとおもふにも青人草ぞたからなりける
つたへきて國のたからとなりにけり聖のみよのみことのりぶみ
國といふくにのかゞみとなるばかりみがけますらを大和だましひ

鏡

くもりなく世をたもてとて千早ぶる神のさづけし鏡なるらむ
榊葉にかくる鏡をかゞみにて人もこゝろをみがけとぞ思ふ
しづかにも世のをさまりてよろこびの盃あげむ時ぞまたるゝ

盃

末とほくかゝげさせてむ國のため命をすてし人のすがたは

寫眞

はりがねのたよりのみこそまたれけれ軍のにはを思ひやるにも

電信

荒波をけたてゝはしるいくさぶねいかなる仇かくだかざるべき

軍艦

なみ遠くてらすともし火かゝげつゝ仇まもるらむわがいくさぶね

渡舟

里人のかへる野川のわたし船こまをものせて漕ぎいでにけり

釣舟

浦ちかくこぎかへりきぬ鳥よりもちひさくみえし沖のつりふね

眺望

品川の沖にむかひていくさぶね進む波路を思ひやるかな

薄暮眺望

家なしと思ふかたにもともし火の影みえそめて日はくれにけり

正述心緒

よもの海みなはらからと思ふ世になど波風のたちさわぐらむ

述懷

かみつよの聖のみよのあとゝめてわが葦原の國はをさめむ
まつりごとたゞしき國といはれなむもゝのつかさよちから盡して
山のおく島のはてまで尋ねみむ世にしられざる人もありやと
照るにつけくもるにつけて思ふかなわが民草のうへはいかにと
民草のうへやすかれといのる世に思はぬことのおこりけるかな
よの中はたかきいやしきほど〳〵に身を盡すこそつとめなりけれ
たゝかひの道にはたゝぬ國民もちゞに心をくだくころかな
國をおもふみちにふたつはなかりけり軍の場にたつもたゝぬも
おほづゝの響はたえて四方のうみよろこびの聲いつかきこえむ

雨夜述懷

民草のうへに心をそゝぐかな雨しづかなるよはの寢覺に

寄道述懷

白雲のよそに求むな世の人のまことの道ぞしきしまの道
なにごとに思ひ入るとも人はたゞまことの道をふむべかりけり

寄草述懷

かりそめの言の葉草もともすればものの根ざしとなる世なりけり

寄玉述懷

きずなきはすくなかりけり世の中にもてはやさるゝ玉といへども

人

かくばかりことしげき世にたへぬべき人をえたるがうれしかりけり
世の中の事ある時にあひてこそひとの力はあらはれにけれ

老人

ほど〳〵にたつべき道もあるものを老いにけりとて身をなかこちそ
世の中のつとめをさくる老人も國のためにはもの思ふらむ

親

くりかへす昔がたりにおのづからいさめことばのまじる老人
ひとりたつ身になりぬともおほしたてし親の惠をわすれざらなむ

兄弟

國の爲たふれし人を惜むにも思ふはおやのこゝろなりけり

友

家の風ふきそはむ世もみゆるかなつらなる枝の茂りあひつゝ

民

戰のいとまある日はますらをも都の友のうへやいふらむ
ほど〳〵にこゝろをつくす國民のちからぞやがてわが力なる

農夫　山田もるしづが心はやすからじ種おろすより刈りあぐるまで

教　むらぎもの心をたねのをしへ草おひしげらせよ大和しまねに

學問　事しげき世にたゝぬまに人は皆まなびの道に勵めとぞ思ふ

卒業生　ものまなぶ窓をはなれていまよりは國のつとめにたゝむとすらむ

今はとて學のみちにおこたるなゆるしの文をえたるわらはべ

乘馬　いさみたつ心のこまもひかへけりあとよりつゞく老人のため

運動　ことしあらば軍のみちにたゝむ身は野をも山をもふみならさなむ

心　ちかひたるおのが心をしをりにて誠の道をわけつくしてむ

しきしまの大和心のをゝしさはことある時ぞあらはれにける

山をぬく人のちからも敷島の大和心ぞもとゐなるべき

夢　かざらむと思はざりせばなか〳〵にうるはしからむ人のこゝろは

わがこゝろ千里の道をいつこえて軍の場をゆめにみつらむ

披書思昔　軍人すゝむ山路をまのあたり見しは假寐のゆめにぞありける

思往事　おもふこと多かる頃のならひとて常にはみざる夢をみしかな

今も世にあらばと思ふ人をしもこの曉の夢に見しかな

のこしおく書をしみればいにしへの人の聲をもきくこゝちして

たらちねのみおやの御代の昔をもことある毎に語りいでつゝ

あらたまる世をいかにぞと思ひしはをさなかりつる昔なりけり

いにしへの人のいひてしかねごとをおもひぞいづるをりにふれては

光陰如矢　たらちねのみおやの御代につかへにし人も大かたなくなりにけり

思ふことつらぬかむ世はいつならむ射る矢のごとくすぐる月日に

神祇　神垣に朝まゐりしていのるかな國と民とのやすからむ世を

國民はひとつ心にまもりけり遠つみおやの神のをしへを

寄神祝　かみかぜの伊勢の内外のみやばしら動かぬ國のしづめにぞたつ

寄道祝

ちはやぶる神の御代よりひとすぢの道をふむこそうれしかりけれ

寄國祝

かしの實のひとつ心に萬民まもるがうれし蘆原のくに

橿原の宮のおきてにもとづきてわが日本の國をたもたむ

仁

國のためあたなす仇はくだくともいつくしむべき事な忘れそ

誠

ことのはにあまる誠はおのづから人のおもわにあらはれにけり

行

世の中の人の司となる人の身のおこなひよたゞしからなむ

折にふれて

思ふこと貫かむ世をまつほどの月日は長きものにぞありける

すゝむべき時をはかりて進まずば危き道にいりもこそすれ

うつせみの世のためすゝむ軍には神も力をそへざらめやは

いかならむ事にあひてもたわまぬはわがしきしまの大和だましひ

戰のにはにもたゝであた波に沈みし人の惜くもあるかな

くにの爲身をかへりみぬますらををあまたえにけりこの時にしも

夢さめてまづこそ思へ軍人むかひしかたのたよりいかにと

軍人つくす力のあらはれてけふもすゝみしたよりをぞきく

おのが身にいたでおへるもしらずしてすゝみも行くかわが軍びと

たゝかひの場はいかにと思ふかないなゝく駒の聲をきくにも

仇まもる船をいかにとおもふかな青海原を見るにつけても

戰のにはのおとづれいかにぞとねやにも入らずまちにこそまて

つばらにもしらするふみにつはものゝ勇む姿も見るこゝちして

とる筆はかぎりありけり使してとはせてを見むたゝかひの場

つかひせし人のかへるをまちつけて軍のにはのことをこそ問へ

軍人ちからつくしゝかひありて仇もなかばはまつろひにけり

石だゝみかたきとりでも軍人みをすてゝこそうち碎きけれ

ひさしくもいくさのにはにたつひとは家なる親をさぞ思ふらむ

折にふれて

國の爲いくさのにはにたつ人に仇なすやまひふせぎてしがな
年へなば國のちからとなりぬべき人をおほくも失ひにけり
たゝかひに身をすつる人多きかなおいたる親を家にのこして
はからずも夜をふかしけりくにのため命をすてし人をかぞへて
港江に萬代よばふ聲すなりいさををつみし船やいりくる
かぎりなき世にのこさむと國の爲たふれし人の名をぞとゞむる
戰のにはにたふれしますらをの魂はいくさをなほ守るらむ
よとともに語りつたへよ國のため命をすてし人のいさをを
くにのため心も身をもくだきつる人のいさををたづねもらすな
思ふことつらぬきはてゝ國民の心やすめむときぞまたるゝ
いかにぞとおもひしことはさもあらで思はぬことをきく世なりけり
野も山もさびしかるらむ花紅葉みつゝ遊ばむ年にしあらねば

ちはやぶる神の心にかなふらむわが國民のつくすまことは
なりはひはよしかはるとも國民の同じこゝろに世を守らなむ
國民のひとつごゝろにつかふるもみおやの神のみめぐみにして
身をまもる道はひとすぢ位山たかきいやしきしなはあれども
ぬけいでしふしを見せなむいやましに竹のそのふのしげりあひつゝ
あらたまる事の始にあひましゝみおやのみよを思ひやるかな
いちはやく進まむよりも怠るなまなびの道にたてるわらはべ
家富みてあかぬことなき身なりとも人のつとめにおこたるなゆめ
いそのかみ古きためしをたづねつゝ新しき世のこともさだめむ
いにしへの御代の教にもとづきてひらけゆく世にたゝむとぞ思ふ
さわがしき風につけても外國にいでゝ世渡る民をこそおもへ
あがたみにやりてし人のものがたり今日こそきかめ暇えたれば

折にふれて

をちこちの縣守るひとつどひけり民のなりはひとはせてを見む
さまぐ〜のうきふしをへて呉竹のよにすぐれたる人とこそなれ
ことしげき世にはあれども國民を教ふる道に心たゆむな
使してとはせてをみむ山里にすめる老人さびしからむを
わけばやと思ひ入りぬる道にしも高きしをりのみえそめにけり
しほどきになりにけらしも濱どのゝかきね近くも波のおとする

明治三十八年

新年山

富士のねに匂ふ朝日も霞むまで年たつ空ののどかなるかな
たちかへる年のほぎごと敷島の道によりてぞ民もいひける

新年祝道

あたらしき年のたよりに仇の城ひらきにけりときくぞ嬉しき

折にふれて

あらたまのとしたつ山をみる人のこゝろぐ〜を歌にしるかな

初春風

梅にふれ柳にふれてきのふけふ風のこゝろも春になるらし

谷鶯

都にはいづる心やなかるらむ谷かげにのみ鶯の鳴く

老梅

さむしとてこもるべしやは枝くちし老木のうめも花さきにけり

山家梅

風さえて雪のみふりし山里も梅さきにけり時の來ぬれば

旅宿梅

旅衣ぬぎかへずして見つるかなあるじがいけし梅のひと枝

折梅贈人

うめの花をりてを見せむ老人は春さむしとてとはじと思へば

梅花散

まつりごといとまなきまに過ぎにけり久しと思ひし梅のさかりも

野春風

うら〜とかすむ春野も栄の花のかをるばかりの風はありけり

朝春雨

花どきの朝ぐもりかとおもひしを音せぬ雨のふりいでにけり

夕春雨

燕とぶしだり柳に夕日かげかつさしながらはるさめぞ降る

待花

木のもとにいづればまづぞ待たれける花みて遊ぶ春ならねども
さかばかつ散りなむ花をまちどほに思ふぞ人のこゝろなりける

明治三十八年

雨後花　春雨のなごりの露をにほひにてたわめる花のうるはしきかな
別業花　うつせみの代々木の里のなりどころ花の梢も苔むしにけり
窓前花　窓のとの花はさかりに匂ふとも書よむわらは心ちらすな
庭前花　宴せむいとまなしともしらずしてわが庭櫻さきそめぬらむ
老人見花　このもとにいでゝぞ遊ぶ老人も花のときには家にこもらで
花下宴　はまどのゝ花のうたげを年毎に外國人も待つといふなり
花下言志　ちかゝらばわが庭ざくら北支那のたむろに折りてやらましものを
　たゝかひのにはのみ思ふこの春は花の木かげもしづごゝろなし
　あらたまの年にひとたびさく花を心しづかにみむ春もがな
花時風雨多　雨風のおほき年かな櫻花まちつるほどはのどかなりしを
落花　なか〳〵にたづねおくれて散る花のさかりにあひぬ嵯峨の山ぶみ
雨中落花　ふく風をふりしづめたる春雨になほとゞまらでちる櫻かな

遲日　まつりごといとまなき身も春雨のふる日は長くおもほゆるかな
春田　遠乘にいでにし人はかへれども春の日かげはなほたかくして
春夕　いくか經てかへしはつべき小山田にたてるをのこの數のすくなき
春夢　くれぬべく見えての後もくれぬかな柳のいとのながきはる日は
春遠情　曉をしらずといへる春ながらことしは夢もやすくむすばず
　ひむかしの都の空も春寒しさえかへるらむ北支那の山
　故郷を遠くはなれていくさ人花のさかりもしらずやあるらむ
折にふれて　春のたつ空にむかひて世の中ののどかにならむ時をこそまて
　あつ氷とくるを待ちて北の海にすゝみゆくらむわが軍ぶね
　さくら花霞みてにほふ山みれば世にはことある春としもなし
水邊卯花　鮎はしる山川のせにかげ見えてひとむらうつぎ花さきにけり
尋時鳥　時鳥いでにしあとに來にけらしたづぬる山も聲のすくなき

橘遠薫　九重の庭のたちばな吹く風にわたどのこえてかをりきにけり
なか〳〵に遠ざかりてぞまさりける花橘のたかきかをりは

茶摘　このめつむ宇治のをとめごいまめかぬその手ぶりこそゆかしかりけれ

梅雨　梅雨にたゝみのうへもしめれるをたむろのうちぞ思ひやらるゝ

梅雨寒　さみだれの雨のさむさにおもふかな夏は暑きがこゝちよしとは

風前螢　おふ人もあらぬ中洲の蘆原を風にふかれてゆくほたるかな

海邊夏月　あしはらの螢のかげは消えはてゝみちたる汐に月ぞ浮べる

沙月涼　白波のよせてあらひしあとみえてまさごぢ清し夏のよの月

夜納涼　ともしびも吹きけつばかり風たちてはしる涼しき夏のよはかな

夏雲　雲ばかり空にまよひて夕立のふりいでぬまの暑くもあるかな

夏山水　たらぬことなしとや夏は思ふらむ水にとみたる鹽原のさと

故郷夏　山水を池にひきたるふるさとの庭こそ夏はこひしかりけれ

夏木　一木にて庭をおほへるくすのきの陰こそ夏はすみよかりけれ

夏花　生垣のかなめのうへにさきながらねざしはみえぬ畫顔のはな

煽風器　かざぐるまいざかけさせよ日ざかりの暑さいとはず人のまゐくる

夏述懷　まつりごといでゝきくまはかくばかりあつき日としも思はざりしを

寄夏草述懷　國のため民の爲には夏草のことしげくともつとめざらめや

折にふれて　つはものゝ毛織の衣ぬらすらむ樺太じまのなつぐさのつゆ
いつかわが心にかゝる雲はれてすゞしき月のかげにむかはむ
暑しともいはれざりけり戰の場にあけくれたつ人おもへば

朝顔　水瓶にうかべおきつる朝顔もしぼまむ時のくればしぼみぬ

野亭萩　やちくさの花野を庭と見る庵もなほ秋萩をうゑてけるかな

薄隨風　秋風や吹きかはりけむしの薄そむきし方にうち靡くなり

待月　海原もひと目にみゆるたかどのに登りてまたむ秋の夜の月

對月　さまざまにもの思ふ夜もさやかなる月にむかへばなぐさまれけり
港月　いくさ船みなとにいりて波風のしづまれるよの月やみるらむ
月似古　たらちねのみおやの宮にをさなくて見しよこひしき月のかげかな
月夜遠情　外國の野邊のたむろにこの秋も月やみるらむわがいくさびと
月前霧　大空はさやかに見えてさぎりたつ水のうへくらし秋のよの月
秋水聲　なく蟲のこゑもまじりてふくる夜の枕に寒き水の音かな
折にふれて　千町田のことしのみのりいかにぞとあがたの人にとはせてをみむ
霜夜聞鐘　霜ふみて撞くらむ人の寒ささへ思ひやらるゝ鐘のおとかな
木枯　九重のうちにありても木枯のふきあるゝ夜はねられざりけり
寒月入窓　窓のとやさしわすれけむわたどのに冴えたる月のかげのみゆるは
雪　たゞしばしあけてみるまに板じきのうへまでつもるけさの雪かな
　ふる雪もまたれざりけりつはものゝたむろの寒さおもふ今年は
雪滿群山　大空はみどりにはれて山といふ山みなしろく雪ふりにけり
海邊雪　うちよする波はなみともみゆるかな渚の松にゆきはつもれど
禁庭雪　吹上のまつのあらしもうづもれて雪しづかなりこゝのへのには
雪中人來　埋火のもとにいざなへふる雪のはれまもまたできたる老人
待春　戰のにはの寒さをおもふにもまづ待たるゝは春にぞありける
歲暮　人みなのおどろきがほに惜むかなにはかにくるゝ年ならなくに
冬夢　窓をうつ霰のおとにさめにけりいくさの場にたつとみし夢
折にふれて　たかきびの畑にこほれる霜ふみて仇さぐるらむつはものゝとも
天　すめるもの昇りてなりし大空にむかふ心も清くぞありける
嶺上雲　とほければ風のひゞきはきこえねどたかねの雲の動きそめたる
長雨　はれまなく降る長雨に川水のあふれむことをまづおもふかな
行路雨　道のべにわれを迎へて立つ人のぬれもやすらむ雨のふりくる

曉
原
道
波
海
四海清
島
故郷池
家
餞別
旅思

曉のねざめのとこにおもふこと國と民とのうへのみにして
山よりもさびしきものは限なき荒野の原をゆく日なりけり
しるべする人をたよりにわけいらばいかなる道かふみ迷ふべき
蹈み分くるひとなかりせば末つひにわかずやならむちよのふる道
あるゝかと見ればなぎゆく海原のなみこそ人の世に似たりけれ
秋つしま四方にめぐれるうなばらの波こそ國のかきねなりけれ
よものうみ波しづまりてちはやぶる神のみいつぞかゞやきにける
しまといふしまのはてまで司人めぐみの波をかけなもらしそ
舟うけてをさなあそびをせし時を思ひうかぶる庭のいけ水
ことそぎし昔の手ぶりわするなよ身のほど〳〵に家づくりして
盃をあげてぞ祝ふとつくにゝ旅ゆく人のつゝがなかれと
ゆく所わが國ながら旅にあれば都おもはぬときなかりけり

旅中述懷
旅宿人來
驛中眺望
田家
田家煙
草
竹
鶯
鴉
馬
軍馬
酒

なりはひの暇なき世を思ふかなしづが手ぶりをまのあたりみて
うれしくも旅のやどりをとひきけり都にありとおもひつる人
たびねする山邊のけしきおもしろし繪にうつさせて家づとにせむ
をさな子をはぐゝみながら田に畑にいそしむしづの暇なげなる
縣守こゝろにかけよしづがやのかまどの煙たつやたゝずや
うとましと思ふ葎はひろごりて植ゑてし草の根はたえにけり
ますらをの心に似たりいさゝかもまがるふしなき窓のくれ竹
山深くこもりしたかもいでぬらし軍のかちを世につげむとて
園守におはれやすらむかしましく鴉なくなり庭のはやしに
うちのりて雪の中道はしらせし手馴のこまも老いにけるかな
たゝかひの場にすゝみて乘る人と共にたふれし駒はいくらぞ
冬の夜の寒さをしのぐ酒だにもえがたかるらむつはものゝとも

書　うるはしくかきもかゝずも文字はたゞ讀みやすくこそあらまほしけれ
　　よろづよの國ののりともなる書をのこしてしがなこの時にして

詞　生ひたちし縣によりてかはりけり同じやまとの人のことばも

歌　戰のいとまある日はものゝふも言葉の花をつむとこそきけ
　　ひとりつむ言の葉草のなかりせばなにゝ心をなぐさめてまし
　　新しきふしはなくとも吳竹のすなほならなむ大和ことの葉
　　むらぎもの心のうちに思ふこといひおほせたる時ぞうれしき

手習　手ならひをものうきことに思ひつるをさな心をいまくゆるかな
　　ときゞにうつりゆく世のありさまを畫にかゝせてものこしおきてむ

畫　きよき瀨に人の心をみちびくはこの山水のうつし繪にして

山水畫　ひとひらのかたをしるべに軍人しらぬ野山にせめかいるらむ

圖　ものか、む暇なければすらせたる硯の墨もそのまゝにして

硯

旗　くもりなき朝日のはたにあまてらす神のみいつをあふげ國民

笠　しづはけふ家にこもりてくらすらむ菅のをがさの軒にかゝれる

玉　さまゞ〳〵の玉をあつめてきずなきはえがたきものとさらにしりぬる

盃　いさをある人をつどへて盃をあたへむ時をまたぬ日もなし

花瓶　うるはしき花をゑがける小瓶には松の枝をや折りてさしてむ

新聞紙　みな人の見るにひぶみに世の中のあとなしごとは書かずもあらなむ

時計　進むありおくるゝもあり時はかるうつはの針もまち〳〵にして

船　數あまたあるが中にも國にしてつくりし船をみるぞうれしき
　　いそしみてます〳〵船はつくらなむ海をめぐらす國のかためにあた波をしづめつくして年もいまくれの湊にかへる船かな

港船　とる棹のこゝろ長くもこぎよせむ蘆間の小舟さはりありとも

蘆間舟　遠けれどまがはぬものは波のうへにつらなる船の帆かげなりけり

遠帆連波

晩鐘　人しげき都の市にきゝてだにさびしきものを入相のかね

花火　かちいくさ祝ふなるらむ市人が花火うちあぐる音きこゆなり

述懐　思ふことおほかる中にをり〳〵はなぐさむこともあるよなりけり

たゝかひのうへに心をつくしつゝ年のふたとせすごしけるかな

末つひにならざらめやは國のため民のためにとわがおもふこと

寝覺述懐　ゆくすゑはいかになるかと曉のねざめ〳〵に世をおもふかな

男　弓矢とる國にうまれしますらをの名をあらはさむ時はこの時

女　なよたけはすなほならなむうつせみの世にぬけいでむ力ありとも

老人　いさみても弓矢のことをかたりてしますらをいたく老いにけるかな

子　年高き老木の松はいにしへのあとゝふ道のしをりなりけり

友　世の中のことまだしらぬうなゐ子も時に合ひたる遊をぞする

わたつみの波のよそにもへだてなく親しむ友はある世なりけり

民　國の爲いよ〳〵はげめちよろづの民もこゝろをひとつにはして

海人　いさりする親をたすけてあまの子はいとけなきより小舟こぐなり

樵夫　柴かりにいとけなきよりいづる子はまなびの道に入るひまやなき

教　ちはやぶる神のをしへをうけつぎて人のこゝろぞたゞしかりける

學生　世の中の風にこゝろをさわがすなまなびの窓にこもるわらはべ

おこたらず學びおほせていにしへの人にはぢざる人とならなむ

心　すなほなるをさな心をいつとなく忘れはつるが惜しくもあるかな

しのびてもあるべき時にともすればあやまつものは心なりけり

夢　まどろめば夢にぞみゆるむらぎもの心にかけて思ふひとこと

思往事　さま〴〵のことにあたりて思ふかな國ひらかしゝ御代のみいつを

社頭　神路山みねのまさかきこの秋は手づからをりて捧げまつらむ

社頭杉　しげりあふ杉の林をかこひにてちりにけがれぬ神のひろまへ

神祇

世の中にことあるときぞしられける神のまもりのおろかならぬは

寄國祝

うけつぎて守るもうれし千早ぶる神のさだめしうらやすの國

寄民祝

民草のしげりそふこそ葦原の國のさかゆくもとゐなりけれ

仁

しづがうへに心をとめて縣もりたづきなき身ぞいつくしまなむ

誠

とき遲きたがひはあれどつらぬかぬことなきものは誠なりけり

勇

ちよろづの仇にむかひてたわまぬぞ大和をのこの心なりける

思

國民のうへやすかれとおもふのみわが世にたえぬ思なりけり

凱旋の時

外國にかばねさらしゝますらをの魂も都にけふかへるらむ

凱旋觀兵式にのぞみて

戰にかちてかへりしつはものゝ勇ましくこそたちならびけれ

凱旋觀艦式に臨みて

いさましくかちどきあげて沖つ浪かへりし船を見るぞうれしき

折にふれて

おのづから仇のこゝろも靡くまで誠の道をふめや國民

老人を家にのこしていくさびと國のためにといづるをゝしさ

ともしびをさしかふるまで軍人おこせしふみをよみ見つるかな

いつの日か歸り來ぬべきいくさ人ねぎらはむとてやりし使は

をゝしくも連りきつるあた船をうち碎きけりわがいくさびと

思ふことつらぬかずしてやまぬこそ大和をのこのこゝろなりけれ

國の爲いのちをすてしものゝふの魂や鏡にいまうつるらむ

むかしよりためしまれなる戰におほくの人をうしなひしかな

身をすてし人をぞ思ふまのあたり軍のにはのことをきくにも

萬代もふみのうへにぞのこさせむ國につくしゝ臣の子の名は

とつくにの人もよりきてかちいくさことほぐ世こそうれしかりけれ

天地の神にぞいのる民のため雨風ときにしたがひぬべく

折にふれて

久方のあめにのぼれるこゝちしていすゞの宮にまゐるけふかな
さくすゞの五十鈴の宮の廣前にけふおほ幣をさゝげつるかな
くもりなきあしたの空に神路山かうぐ〳〵しくも見えわたるかな
えぞのおく南の島のはてまでもおひしげらせよわがをしへ草
つくぐ〳〵と思ふにつけて尊きはとほつみおやの御稜威なりけり
いさみたつ人の心の若駒よあやふき道にすゝまざらなむ
手綱にもまかせぬものは勇みたつ人の心のあらごまにして
世に廣くしらるゝまゝに人みなのつゝしむべきはおのが身にして
こゝろざす方こそかはれ國を思ふ民の誠はひとつなるらむ
世の中の事ある時にあひぬともおのがつとめむわざな忘れそ
物學ぶ道にたつ子よおこたりにまされる仇はなしとしらなむ
ひらけゆく世のさま見ればなか〳〵に昔にかへることもありけり
さまぐ〳〵にもの思ひこしふたとせはあまたの年を經しこゝちする
けなげにも生立ちぬべきさまみえて乳子のまなじりたけくもあるかな
つみためし言の葉ぐさに道の師の露のひかりやそひてかへらむ

明治三十九年

新年宴會　新しき年のうたげにうれしくもかはらぬ人のつどひけるかな
初春祝　軍人みなひきあげてひとごゝろのどかなる世の春たちにけり
樓上聞鶯　のぼりきて窓をあくれば鶯もたかきにうつる聲きこゆなり
見梅　まつりごと暇ある日にたちいでゝはじめて梅の花をみるかな
梅花散　梅の花ちる頃よりぞおほかたの春の匂は深くなりぬる
海邊若草　白波のよせてはかへるまさごぢにいつ若草の生ひいでにけむ
蕨　老人のなぐさめ草におくりてむ庭の蕨はすくなけれども

春月寒　さかりなる花の梢に匂へどもふくれば寒し春のよの月
里春雨　いはほきる音もしめりて春雨のふる日しづけき白川の里
春駒　友をおひともにおはれて若駒のおもしろげにも遊ぶのべかな
花漸開　濱殿の宴のまうけはやくせよあしたゆふべに花のさきそふ
風靜花盛　櫻花かをるばかりの春風はふかぬ日よりものどけかりけり
月前花　ながゝらぬ花のさかりのうれしくも月の夜ごろにあひにけるかな
花滿山　いまよりは櫻山とや名づけてむ向ひの高嶺花さかりなり
山家花　垣根にはうゑぬ宿かなうちわたすたかねの花を庭木にはして
觀櫻會　のどかなる春をぞいはふ濱殿の花のうたげに人をつどへて
翫花　さかりのみなにかはいはむ櫻花ふゝむも散るものぞなき
夕落花　あすもまた人に見せむと思ひしをこの夕風にちる櫻かな
池落花　はまどのゝ庭のいけ水あさしほのみちたるうへにちる櫻かな

蝶　咲きつゞく花より花にあくがれて蝶も夢みるひまやなからむ
藤花盛　春の日の長きさかりをさかりにて藤の花さく紫のには
春旅　とほからぬ旅にいでゝもみてしがな鶯なきてさくらちるころ
折にふれて　親も子もうちつどひてやいくさ人ことしは家の花を見るらむ
殘鶯　たけのこの竹になりたる庭にまだ春をのこして鶯のなく
新樹風　みづえさす樫の下みち露ちりて夏なほ寒き朝かぜぞふく
都時鳥　きゝしらぬ人もありけりほとゝぎす都になくはたまさかにして
早苗　早苗とるこゑぞ賑ふたゝかひにいでにし民も里にかへりて
橘　去年の實の殘るかたへに橘のことしの花もさき匂ひけり
梅雨久　さみだれの雨の久しさいつはあれど今年に似たる年なかりけり
蘆間螢　川岸のあしはらなびき吹く風にとばぬ螢のかげうごくなり
瞿麥　しきしまのやまと撫子もゝ草の花にまさりていつくしきかな

明治三十九年

百合　傾きてさけるを見ればてらす日のかげやまばゆき姫百合の花

萍花　風わたる山下水にたゞよひてすゞしくみゆる浮草のはな

夕立　はたゝがみ光きらめく夕立に蔀おろせといひさわぐなり

野夕立　かゞやきし入日のかげもきえはてゝふじの裾野に夕立のふる

樹陰納涼　わが庭の大木のかげは風すゞし山にひとしと人のいふまで

夏杉　さしかはる杉のわか葉に山里の垣あたらしく見ゆるころかな

殘暑　かざぐるまかけぬ日もなし秋くれど西日のあつさ堪へがたくして

行路薄　いづくをかわけてきつらむかへりみる野みちはすべて薄なりけり

淺茅　いなごとぶかげのみ見えて露しげき淺茅が原はゆく人もなし

秋風　あしひきの山さやかにもうちはれてすみたる空に秋風ぞふく

秋霜　ながつきの在明の月の影さえて紅葉のうへにみゆるはつ霜

霧中月　雲ならばひまもる影もまたましを霧にこもれる秋の夜の月

旅中月　あかざりし花野の月よ旅やかたいでゝふたゝび見まほしきかな

霧未晴　水のうへに薄き日かげはさしながらまだはれやらぬうぢの川霧

菊花盛久　ふたゝびの宴をやせむ菊の花ひかずふれどもなほさかりなり

初紅葉　たゞ一木色づきたるは初時雨そめこゝろみし梢なるらむ

雨後紅葉　山のはにぬれて見ゆるは村時雨いまそめあげし紅葉なるらむ

秋田家　山田もるしづを思へばかばかりの秋の夜寒をなにかいとはむ

折にふれて　秋のよの月毛の駒にむちうちて花野のかぎりわけみてしがな

えびかづら色づきそめぬ山梨の里の秋かぜ寒くなるらし

あとたえしこともさまぐゝきゝてけり秋の長夜のむかしがたりに

いさましく語りかはしていくさ人かへる船路に月やみるらむ

國のためうせにし人を思ふかなくれゆく秋の空をながめて

夕落葉　夕づくひかげろひはてゝ風寒くふきたつ庭にちるこのはかな

明治三十九年

落葉有聲

なか〳〵に風のたえたるよはにこそおつるこのはの音はきこゆれ

湊千鳥

湊江に夜ふけていりし船人のこゑしづまりて千鳥なくなり

山皆雪

北支那にとゞまる人を思ふかなよもの山邊の雪を見るにも

野亭雪

ふりつもる雪のひろ野にたゞひとつ見ゆるいほりの寒げなるかな

田家雪

しづがすむ藁屋あやふくみゆるまでふりつもりたるけさの雪かな

雪中情

いさみたつ駒に鞍おきてふりつもる雪のなかみちわけみてしがな

夜神樂

ふけゆけばさえこそまされ榊葉のこゑにも霜のおくこゝちして

歳暮祝

いくさ人かへるむかへてつねよりも賑ひまさる年のくれかな

冬日

みじかしと思ふ心に冬の日はなか〳〵ものゝはかどりにけり

冬海

波風のふきあれぬ日ぞなかりけるあたゝかなりと聞きし海べも

冬花

雪はみなしづれし枝にまばらにもさけるが寒しひゝらぎの花

天

ひさかたの空はへだてもなかりけりつちなる國はさかひあれども

野

朝ゆふにむかひなれたる久方の空ははるけきものとしもなし

畑

にひばりの小田もひと町みゆるかな小松たかゞや茂るひろのに

道

園のうちを畑になしてもみつるかなしづが營むさまをしらむと

ひろくなり狹くなりつゝ神代よりたえせぬものは敷島の道

近きよりゆかむとしてはなか〳〵に遠くぞまよふ世の中のみち

細徑

こゝろざす方を定めて皆人の世にたつ道にまどはざらなむ

岩

小山田の畔のほそ道細けれどゆづりあひてぞしづは通へる

橋

わたつみの波のそこなるかくれ岩あらはるゝまで汐のおちたる

さきにゆく人ちひさくもみゆるかなこの川橋の長さしられて

つはものゝ渡しゝ橋やのこるらむありなれ川のひろきながれに

國

ちはやぶる神の心にかなふべくをさめてしがな葦原のくに

都

とほつおやの定めましつる山城のたひらの都とはにあらすな

里
うつせみの代々木の里はしづかにて都のほかのこゝちこそすれ

故郷木
すみし世にかはらぬものは昔より老いたりと見し松ばかりにて

故郷柱
故郷のふるき柱によりそひてすみし昔をおもひいでつゝ

農家
ひとりしていくらの小田をまもるらむしづが假庵のかずぞすくなき

鄰
さしなみのとなりにかよふ道ならむ籬の竹のひまのみゆるは

旅中山
さしなみのとなりの人をたのみにてひとりや老が庵にすむらむ

旅中情
はるかなるものと思ひしふじのねをのきばにあふぐ靜岡のさと

國民のむかふる見れば遠くこし旅のつかれも忘られにけり

いとまなきなりはひやめて國民のわが馬車いで迎ふらむ

旅宿
草まくら旅のやどりのせばければ車のおとを枕にぞ聞く

忘草
たねなくて茂りもゆくか世の中の人のこゝろのものわすれぐさ

庭松
萬代をしめたる庭の松かげにいくたび家はつくりかへけむ

林鳥
かくばかりひろき林をいかなればひとつ木にのみ鳥のとまれる

小鳥馴
餌をまきていざあさらせむわが庭にけふも小鳥のなれて遊べる

鶴
かぎりなき天つみそらはあしたづの翅をのぶるところなりけり

晴天鶴
いたゞきに朝日をうけて久方のくもゐはるかに鶴なき渡る

鶴宿松
あしたづのやどりとなれる老松はいくらのひなかおほしたてけむ

馬
癖なきはえがたかりけり牧場よりすゝめし駒のかずはあれども

薬
いく藥もとめむよりも常に身のやしなひ草をつめよとぞおもふ

讀書
外國の昔がたりもきゝてけりときあきらめし書をよませて

古典
石上ふるごとぶみをひもときて聖の御代のあとを見るかな

筆
をさなくも選びけるかなとる筆の力はわれにあるべきものを

射
思ふことつらねかねてはつくぐとふでのさきのみうちまもるかな

梓弓ひきしぼりても放つ矢の的を貫く音のをゝしさ

弓矢　ゆみやもて神のをさめしわが國にうまれしをのこ心ゆるぶな

玉　いさゝかのきずなき玉もともすればちりに光を失ひにけり

鏡　靖國のやしろにいつくかゞみこそやまと心のひかりなりけれ

盃　いさをたてし人をつどへて盃をさづけむ時になりにけるかな

寫眞　國のため命をすてしますらをの姿をつねにかゝげてぞみる

船　戰ひしときをぞ思ふしらなみのかへりし船をみるにつけても

漁火　沖遠くみえし小島はくれはてゝいさり火あかき波のうへかな

鐘聲何方　ふきまよふ風にまぎれて東とも西ともわかぬかねのおとかな

燈籠　松かげの石のともし火ともさせてよるしづかなる庭を見るかな

述懷　わが身よにたつかひありてちよろづの民の心をやすめてしがな

寄船述懷　よもの海なみしづかなる時にだになほ思ふことある世なりけり

川舟のくだるはやすき世なりとて棹に心をゆるさゞらなむ

老人　老の坂こえたる人はなか〳〵につかふる道にたゆまざりけり

子　同じこと問ひかへしつゝをさな子があそぶうちにやもの學ぶらむ

教育　ものをだにまだいはぬ子も萬代とよばへばやがて手をあげにけり

年々にひらけゆく世のをしへ草身のほど〳〵に摘ませてしがな

幼稚園　いかならむときにあふとも人はみな誠の道をふめとをしへよ

うちつれて園生にあそぶうなゐ子は學ぶとなしにもの學ぶらむ

教師　朝夕にまもり育つるをしへ子はうみの子のごとかなしかるらむ

心　つくろはむことまだしらぬうなゐ子のもとの心のうせずもあらなむ

世の人にまさる力はあらずとも心にはづることなからなむ

心靜延壽　しづかなる心のおくにこえぬべき千年の山はありとこそきけ

宴　よろこびのうたげするこそ嬉しけれもゝの司をうちつどへつゝ

夢　しばらくの眠のうちにいかにして遠きむかしを夢にみつらむ

披書思昔

諫めてし人のことばもおもひいでぬかきのこしたる書をひらきて

社頭曉

曉の露にぬれたる玉串をいまさゝぐらむ神のみまへに

社頭祝

さくすゞの五十鈴のみやの神風のふきそはる世ぞうれしかりける

神祇

日の本の國の光のそひゆくも神の御稜威によりてなりけり

國民のうへやすかれと思ふにもいのるは神のまもりなりけり

祝言

かみかぜの伊勢の宮居を拜みての後こそきかめ朝まつりごと

勇

をぐるまのめぐるまに〳〵響くなりわが國民のよろこびのこゑ

聲

いくさ人身をかへりみず進みけむあとこそ見ゆれぬきし砦に

折にふれて

目に見えぬ人の心のよろこびも聲によりてぞ聞きしられける

國の爲いのちをすてしますらをのたま祭るべき時ちかづきぬ

いさみたつ駒をつらねて軍人かへりこむ日もちかづきにけり

軍人ちかくつどへて海山のものがたりきくときは來にけり

かちどきをあげてかへれる軍人まぢかく見るがうれしかりけり

たひらかに世はなりぬとて敷島の大和心よ撓まざらなむ

いかにぞと思ひやるかな戰のをはりしのちのたみのなりはひ

國のためたゝれずなりし民草に惠の露をかけなもらしそ

ますらをも涙をのみて國のためたふれし人のうへをかたりつ

波風はしづまりはてゝよもの海にてりこそわたれ天つ日のかげ

むらぎもの心たゆまず進みなばさがしき山も越えざらめやは

うたはせてきくぞたのしき國民の言の葉ひろくめしあつめつゝ

いつくしとめづるあまりに撫子の庭のをしへをおろそかにすな

年をへてすたれしこともおこさばや聖の御代のあとをたづねて

歳月は射る矢のごとしものはみなすみやかにこそなすべかりけれ

みちのべにわれを迎ふるくにたみのたゞしきすがた見るぞうれしき

明治四十年

新年松　あたらしき年のほぎごときくにはに萬代よばふ軒のまつかぜ

早春月　すさまじとおもふ光はうせながらまだ風寒し春のよの月

曉鶯　月もまださしのこりたる曉の庭のさゝふにうぐひすのなく

松上鶯　うぐひすの鳴くこゑすなり櫻田の堤の松の霞がくれに

春雪　ひとたびは花もさくべくあたゝかになりにしものを泡雪のふる

旅宿梅　さかりなる梅の林はうれしくもこよひのやどの庭にざりける

菫　をさな子につませまほしと思ふかな菫花さく庭をめぐりて

春曉月　母が手にひかれてあゆむうなゐこのたちとまりては菫つむなり

春夕月　さく花のいろまだ見えぬ曉の山しづかなり春のよの月

青柳のかげふむ道にいつよりかにほひそめけむ夕月のかげ

行路春月　おぼろ夜の月のよみちのくらければ車の影もうつらざりけり

故郷春月　花のかげふむ人もなきふる里のおぼろ月夜やさびしかるらむ

春雨靜　蝶もまだ枝に眠りて花園のあめしづかなる朝ぼらけかな

春雨夜靜　をちかたに鳴くやかはづの聲はして春の雨夜のしづかなるかな

老人がむかしがたりもきゝてけりものしづかなる春の雨夜に

春駒　はてもなき野に放てども春駒のひとりは遠くあそばざりけり

親のあとしたひて遊ぶ若ごまのをさな心は人にかはらず

はるの野にむれてあそべるわか駒を庭に放ちてみまほしきかな

風前花　山かぜにたわむ櫻の枝みれば人のこゝろもやすからぬかな

雨中花　さくら花さかりになりぬ雨かすむあしたの庭もくらからぬまで

社頭花　都人そでをつらねてかみぞのゝ花のさかりに遊ぶ春かな

見花　つかさ人さゝぐるふみは多かれど花みるほどのひまはありけり

對花思昔　をさなくて見し世の春をしのぶかなふるき都の花のさかりに

落花　ときのまに散りゆくものか櫻花こゝらの日數人にまたせて

人みなの惜む心はしりながらかぎりある世と花のちるらむ

寄花祝　治まれる世の春風をうけてこそ花ものどかに咲き匂ひけれ

暮春雨　さくらばな散るまで春はたけたれど雨なほ寒き朝ぼらけかな

折にふれて　花見つゝ遊ぶ春日におもふかなたがへす民のいとまなき世を

おのがじゝつとめを終へし後にこそ花の陰にはたつべかりけれ

始聞時鳥　平かに世はをさまりて國民と共に樂しむ春ぞ嬉しき

時鳥一聲　めづらしきこの初聲を時鳥おほくの人にきかせてしがな

夏月　あしひきの山時鳥ふた聲となのらぬ心たかくもあるかな

まさごぢにうかれ烏のかげみえてすゞみのにはの月ふけにけり

日にやけしいさごのうへも露みえて月夜すゞしくなれる庭かな

夏草　かたはらに眠るうなゐは夏草をかるしづのめがうまごなるらむ

夕立　俄にも照る日のひかりかきくらしいらかをたゝく夕立のあめ

夕立過　夕立の雨は高嶺をこえにけり並木の松に風をのこして

納涼　ゆふべ〳〵すゞみのにはにたつことも事なき時に逢へばなりけり

夜納涼　端居せぬよはこそなけれ大空に天の河原のみえそめしより

夏朝　ありあけの月のしづくを蓮葉の上に殘して夜は明けにけり

夏池　藻刈舟こゝろしてさせ池水にはすのわか葉の浮びそめたる

夏田家　つばめとぶ影のみ見えて田うゑ時家に人なき小山田の里

夏竹　しら露の風にこぼるゝ數見えて朝日すゞしき竹の下庵

夏燈　文机のもとにかゝぐるともし火の影さへ暑くおもふよはかな

夏人事　窓のうちに扇とれどもあつき日にてるひをうけてしづの草かる

月前薄　はるゞ〳〵と風のゆくへの見ゆるかなすゝきが原の秋の夜の月

蟲聲滋　月のかげふまむとおもふ淺茅生にみちてきこゆるむしの聲かな

窓前蟲　くさひばり鳴きもぞやむと秋の夜の月なき窓もさゝれざりけり

秋風滿野　遠山の雲も動きて秋の野のちはらかやはら風わたるなり

田秋風　秋風はふきなあらびそ足曳の山田のをしねかりあぐるまで

秋夕　ゆふづく日かげろふ森のこがくれにひぐらしなきて秋風ぞふく

秋夜長　老人が昔がたりもつきぬべしあまりに秋の夜のながくして

月　あきのよの月は昔にかはらねど世になき人の多くなりぬる

松陰の石のともしびけちてみよひるよりあかし秋の夜の月

對月　むかしいま思ひあつめてつくぐゝとふけゆく月をながめつるかな

雲間月　野分だつ雲のひまよりあらはるゝ月の光のすごくもあるかな

月前遠情　たむろしてよな〳〵見てし廣島の月はそのよにかはらざるらむ

雁行映水　鳴きわたる雲居はおきて水底にうつろふ鴈のかげをみるかな

夕霧　堤ゆく人かげ絶えてすみぞめの夕霧くらし寺島の里

待菊盛　みせつべき人をかぞへて青山のそのふの菊のさかりをぞまつ

折菊　いたづらにをりなやつしそ見ぬ人もまだ多からむ庭の白菊

旅宿菊　宴にはつらなりがたき老人にをりてをやらむ庭のしらぎく

折紅葉　一枝はをりてかへらむ旅やかたわがためうゑし白菊のはな

暮秋眺望　夕日影さすやかきねの初紅葉うすしとしらでをらせつるかな

秋雲　うちわたす野末の山に雪みえてかれふのすゝき秋風ぞふく

山路秋行　あかねさす夕日の色に匂へども秋のみそらの雲ぞさびしき

秋水　たのしみは果なきものを夕日影かたぶきにけり秋の山ぶみ

秋海　庭にひくながれも秋はにごらぬを山水いかにすみまさるらむ

折にふれて　しまぐゝもさやかに見えてかゞみなす青海原に秋の風ふく

風寒き秋のゆふべにおもふかな水のあふれし里はいかにと

折にふれて　都にて今年もきゝつ春日野のとぶひの野べのまつ蟲の聲
よむ書もいまはとたゝむ文机のうへにさしくる月のかげかな
さまゞの野菊の花をしどけなくうゑたる庭のおもしろきかな

山落葉　ふきおろす嶺のあらしにさまゞの紅葉ちりしく山のした道
朝霜　霜ふりてさむき朝かな園もりが箒とる手もさぞこゞゆらむ
篠上霜　朝霜のふかさしられて山かげの庭のくま笹青き色なし
林木枯　むら鳥もやどらむかたやなかるらむ林ゆすりてこがらしのふく
寒松　こがらしの風にすまひてひとつ松いくらの冬をしのぎぬらむ
寒松風　我山の松の林にかへりけり空にきこえし木枯のかぜ
氷　くみあげし水のけぶりも消えぬまにつるべの雫はやこほりけり
窓寒月　わたどのゝ窓に枯木の影見えて宮のうちまでさゆる月かな
水鳥　大宮のめぐりの堀を冬ごとにかはらぬやどゝ鴨のつくらむ

朝水鳥　つねに住むをしのつがひをあるじにて今年も池にかものつくらむ
初雪　朝づく日にほふ堤にねぶりけり夜たゞさわぎしいけの水鳥
夜雪　めづらしと思ひもあへずとけにけり霜よりうすきけさの初雪
峯雪　庭白くみゆるは月の光にて雪は早くも降りやみにけり
車上雪　こがらしのふきはらしたる空遠く甲斐のたかねの雪ぞ見えける
舟中雪　しづのをが一人ひきゆくをぐるまの重荷の上につもる雪かな
雪中遠情　乘る人はありともみえず苫の上に雪をつみてもくだる川舟
爐邊閑談　築山のゆきを見つゝもおもふかな樺太島の寒さいかにと
歳暮近　埋火のもとのまとゐに老人が語ることみな昔なりけり
折にふれて　あらたまの年のをはりもちかづきぬ暑し寒しといひくらすまに
煙　高殿のまどおしひらけ櫻田のつゝみの松につもる雪みむ
　あさみどり晴れたる空になびけども煙の末はさびしかりけり

煙

大空もくもるばかりに靡きけりいとなみひろき里のけぶりは

曙

ひむかしのみそらしらむと思ふまに山の姿ぞあらはれにける

朝

しづかにも眠さめたるあしたかな心にかゝる夢も見ずして

夕

司人まかでし後のゆふまぐれこゝろしづかに書をみるかな

鑛山

ひらかずばいかで光のあらはれむこがね花さく山はありとも

窟

いかならむ神かまつれる山かげの窟のうへにしめはへてけり

畑

うるはしくうねづくりせる山畑になにの種をかしづはまくらむ

道

いとまあらばふみわけて見よ千早ぶる神代ながらの敷島の道

絶えたりとおもふ道にもいつしかとしをりする人あらはれにけり

おのが身を修むる道は學ばなむしづがなりはひ暇なくとも

なかばにてやすらふことのなくもがな學の道のわけがたしとて

ゆるされてまなびの窓をいづる子よ思はぬ道にふみな迷ひそ

橋

山川の早瀬の波のたちまちに橋うちわたすいくさ人かな

水

山川のながれは末になりぬれどにごらぬ水は濁らざりけり

水聲

九重のうちもみやまのこゝちして枕にひゞく水の音かな

海上朝

彼の方や東なるらむあさづく日にほひそめたり沖の波間に

磯岩

いそざきはかくれ岩こそ多からめよせくる浪のくだけてはちる

里

にぎはへるさととはなりぬいにし年あらのゝ末とみてし所も

故郷

春秋の花に紅葉にこひしきは昔すみにし都なりけり

郷

へだてなく親しむ世こそ嬉しけれとなりの國も事あらずして

旅宿

事そぎてあればある世と思ひけり旅のやかたに日數かさねて

山家

かきねゆく水にひゞきて松風の音もながるゝやまのした庵

田家燈

ともしびの細き光をたのみにて山田のしづは繩やなふらむ

行路松

うまやぢの並木の松のかげみれば昔の旅のしのばるゝかな

濱松
磯松
庭松
松經年
鳥
朝鳥
鷄
馬
書
歌

明治四十年

はりまがた舞子のはまの濱松のかげに遊びし春をしぞ思ふ
波風をしのぎ〳〵て荒磯の松はちとせの根をかためけむ
むさしのといひし世よりや榮ゆらむ千代田の宮のにはの老松
おほぞらの雲より外に千代へたる松の上にはたつものぞなき
大空につばさをのべてとぶ鳥もねぐらに迷ふときはありけり
朝まだきねぐら離れてたつみれば鳥もつとめはある世なりけり
にはつとり鳴く聲すなり竹村のあなたやしづがすみかなるらむ
ひさしくもわが飼ふ馬の老いゆくがをしきは人にかはらざりけり
人ならばほまれのしるし授けまし軍のにはにたちし荒駒
かみつ代のことをつばらにしるしたる書をしるべに世を治めてむ
いにしへの文の林をわけてこそあらたなるよの道もしらるれ
おもふことうちつけにいふ幼兒の言葉はやがて歌にぞありける

手習
机
太刀
寶
蓄音器
船
海上舟

天地もうごかすといふことのはのまことの道は誰かしるらむ
ことのはのまことのみちを月花のもてあそびとは思はざらなむ
おのが名もかくべくなりぬうなゐ子が手習ふ道に入るとみしまに
よりそはむひまはなくとも文机のうへには塵をするゐずもあらなむ
國の仇はらはむためときたひてし太刀の光は世にかゞやきぬ
神代よりうけし寶をまもりにて治め來にけり日のもとつ國
末までもきかまほしきをたくはへし聲のたゆるが惜しくもあるかな
棹とりて過ぎ行く人はありながら小舟はみえず蘆にかくれて
わが國にありとあらゆる山の名をふねてふ船におほせてしがな
よろづよの聲をのせてもいくさぶねふなおろしする横須賀のうみ
大八洲まもらむ船のとし〳〵にかずそふ世こそうれしかりけれ
いづこより漕ぎいでぬらむたゞひとつ沖にうかべる海士のつり舟

明治四十年

渡舟　こぎわたりこぎかへりつゝわたし舟さををやすむるひまやなからむ

筏　ひとりして早瀬をくだす筏にはかへりて波もかゝらざりけり

漁火　こぎ歸る小舟もあまたみえしかど沖にみちたり漁火のかげ

海眺望　なぎさゆく船のありともしらざりきおきべ遙にうちまもるまは

述懷　事しあらば火にも水にもいりなむと思ふがやがてやまとだましひ

うつせみの世はやすらかにをさまりぬ我をたすくる臣のちからに

世の中をおもふたびにも思ふかなわがあやまちのありやいかにと

寄道述懷　よこさまにおもひないりそ世の中にすゝまむ道ははかどらずとも

老人　世の爲にいさをゝたてし老人は千年の山もこえよとぞ思ふ

老人をつどへてけふもきゝてけり弓矢とりにし昔がたりを

ゆるしたる杖をちからに老人がけしき聞かむと今日もきにけり

親　たらちねの親の心をなぐさめよ國につとむる暇ある日は

子　たらちねのみおやの教あらたまの年ふるまゝに身にぞしみける

思ふ事おもふがまゝに言ひいづるをさな心やまことなるらむ

みなし子にかたりきかせよ國のため命すてにし親のいさをを

す、みゆく世に生れたるうなるにも昔のことは教へおかなむ

幼子のおひたつみれば老人はおもひのほかにかはらざりけり

たらちねのおやの教をまもる子はまなびの道もまどはざるらむ

民　す、む世を見るにつけても思ふかなわが國民のうへはいかにと

隱士　山深くかくるゝ人をむかへても世を治むべき道をとはばや

農　にひばりの田にも畑にもみゆるかな廣くなりゆくしづがなりはひ

漁翁　すなどりは子等にゆづりて蘆の屋に網すく翁あはれおいたり

教育　いさをある人を教のおやにしておほしたてなむやまとなでしこ

庭訓　たらちねのにはの教はせばけれどひろき世にたつもとゐとぞなる

師

わけのぼる道のしをりとなる松は位なくてもうやまはれけり

心

國のため身のほど〳〵に盡さなむ心のすゝむ道を學びて

夢

かけてだに思はぬことも見つるかなあやしき物は夢にぞありける

慕はしとおもふ心やかよひけむ昔の人ぞゆめに見えける

思往事

たむろせし時をぞおもふ廣島の里のうつしゑ見るにつけても

神祇

目に見えぬ神にむかひてはぢざるは人の心のまことなりけり

寄道祝

めにみえぬかみの心に通ふこそひとの心のまことなりけれ

寄世祝

しるべする人を嬉しく見いでけりわがことのはの道のゆくてに

孝

國民のわくるちからのあらはれて道てふみちのひらけゆくかな

行

しづかにも世は治まりて月花にあそぶ今年ぞうれしかりける

たらちねの親につかへてまめなるが人のまことの始なりけり

やすくしてなし得がたきは世の中の人のひとたるおこなひにして

折にふれて

世の中にしられていよ、みがゝなむわが敷島のやまとだましひ

おもふこと思ふがまゝになれりとも身を慎まむことな忘れそ

萬代にうごかぬものはいにしへの聖のみよのおきてなりけり

言の葉のかずよみしてもみつるかなわがまつりごと暇ある日に

世の中の人におくれをとりぬべしすゝまむときに進まざりせば

よの人を導くまではあらずとも進まむ時におくれざらなむ

石上ふるき手ぶりもとひてみむ物しる人を尋ねいでつゝ

いさをある人のあとをもたづねけり縣の里の旅にいでつゝ

暇あればまづこそ思へ戰にたゝれずなりし人はいかにと

かみつよの御代のおきてをたがへじと思ふぞおのがねがひなりける

抜き難き山をもぬきしますらをが手ぶりをみするならしのの原

身にうけしいたでもいえてつはものの世わたる道にいまはたつらむ

折にふれて　開けゆくときにいよ〳〵仰がれぬ聖の御代のたかきをしべは

明治四十一年

鶯　まつりごといとまある日にうれしくも窓のと近く鶯のなく
朝鶯　あしたのみ來てはなくなり鶯もとはむ所の多くやあるらむ
梅　春さむみ雪はしば〳〵かゝれども咲くべき時と梅はさきけり
朝春雨　閨の戸をあけてもくらき春雨に夢のなごりのさめがたきかな
栽花　濱殿の園にさくらをうゑそへつ内外あまたの人にみすべく
待花　をさなくもまたぬ春なし櫻花さかでやむべきものならなくに
田家花　咲く花をやどにのこしてしづのをは長き日ぐらし小田にたつらむ
車中見花　をぐるまのすぐるまに〳〵花をみて今日行く道は遠しと思はず
落花　春風の吹かぬあしたに散る花もこかげにのみはとまらざりけり

春旅　櫻さく野みち山みちゆく旅はあそびにいでしこゝちこそすれ
折にふれて　ひとたびは見むよしもがな名ぐはしき吉野の山の花のさかりを
新竹　千年までおいせざるべき吳竹も生ひたつほどは時のまにして
時鳥　ほとゝぎすおもひもかけぬ一聲に月なきよはの空を見しかな
水雞　とのゐびとかたらふ聲もたえはてゝふけゆくよはに水鷄なくなり
竹間夏月　若竹の葉末にすがる露のまにすゞしき月の影ふけにけり
水邊夏草　たかゝやの風にかたよるひま〳〵にひとすぢみゆる水のすゞしさ
いちご　身のたけにおよぶ夏草かきわけていちごとるなり里のうなゐこ
夏日對泉　清水わくこかげにいでゝすゞむこそわがよの夏のいとまなりけれ
夏朝　朝のまにもの學ばせよをさな子もひるは暑さにうみはてぬべし
夏夕　あかねさす夕日のかげはきえはてぬすゞみの殿にいざうつりなむ
夏海邊　江の島にやどりさだめてわらはべも相模の海のしほやあむらむ

夏車　重荷ひく車のおとぞきこゆなるてる日の暑さたへがたき日に

野徑露　乘る駒のあぶみまでこそぬれにけれあさ露ふかき野路のかや原

聞蟲　さよふかく心しづめてきく時ぞむしの鳴くねはあはれなりける

海邊蟲　浪のおと遠ざかり行くひきしほにむしのねたかし濱の松原

秋田　かりあげむ日をかぞへつゝ千町田の八束たり穗をしづはもるらむ

待月　はやくより出でゝこそ待て宵々におそくなりゆく月を忘れて

月前風　をちこちに尾花なみよる影みえて月すむ野邊に秋風ぞふく

故郷月　舟うけて昔あそびしふるさとの池にや月のひとりすむらむ

馬上紅葉　むちうたば紅葉の枝にふれぬべし駒をひかへむ岡ごえの道

雪中行人　老人があゆみゆくこそ哀なれいまだ拂はぬ雪のなかみち

歳暮祝　つかさ人あまたつどへて賑しく暮れゆく年のうたげをぞする

星　見るまゝに數そふものは大空につらなる星の影にぞありける

塵　ともすればうきたちやすき世の人の心の塵をいかでしづめむ

朝　世を守る神のみたまをあふぐかな朝ぎよめせし殿にいでつゝ

夕　今日もまたゆふべになりぬ司人すゝめし書もよみはてぬまに

夜　ぬばたまのよるこそ書はよむべけれあだし事には心うつさで

富士山　萬代の國のしづめと大空にあふぐは富士のたかねなりけり

名所橋　かなぢゆく車のうちに見つるかな昔わたりし瀨田の長橋

野外旅宿　もの、ふの野邊のたむろを思ふかな草のかりほに一夜やどりて

羇中情　まうでむとおもふ社をよそに見てすぐる旅路のをしくもあるかな

山家鄰　谷川のおなじ流の水くみて鄰へだてぬみやまべのさと

山家燈　ともしびのたかき處にみゆるかなかの山邊にも人はすむらむ

松葉　松の葉はいつのひまにかかはるらむ今ちるといふ時はあらぬを

山路杉　家すこしあるかと見れば山道はまた杉村になりにけるかな

鶴
鶴思子
蝸牛
書
歌
唱歌
太刀
鏡
述懐

我園にやしなふ鶴のひとつがひ年はふれどもおいせざりけり
まへになりうしろになりて雛まもるたづの心のあはれなるかな
世のさまはいかゞあらむとかたつぶりをり〳〵家をいで、見るらむ
家々にひめしふぐらも開くらむまなびの道をひろくせむとて
千萬の民のことばを年毎にす、めさせても見るぞたのしき
まご、ろをうたひあげたる言の葉はひとたびきけば忘れざりけり
幼兒にうたはれてこそ言の葉のしらべいよ〳〵たかくきこゆれ
身にはよしはかずなるとも劍太刀とぎな忘れそ大和心を
われもまたさらにみがゝむ曇なき人の心をかゞみにはして
千萬の民の力をあつめなばいかなる業も成らむとぞ思ふ
國のため高きほまれを得し人の身をあやまたむことなくもがな
た、かひの爲に力をつくしつるたみの心をやすめてしがな

老人
子
國交
教育
學校
師
心
忍往事
寄道祝

さま〴〵のことにあひにし老人の昔がたりぞ身にはしみける
いはけなく遊ぶ子どものさま見ればわれもをさなくなるこ、ちして
したしみのかさなるま、に外國の人もこ、ろをへだてざりけり
國のため力つくさむわらはべを教ふる道にこ、ろたゆむな
まなびやに入りにし日よりうなゐ子がものいひさへもかはりけるかな
學びえて道のはかせとなる人もをしへのおやの惠わするな
すなほなる人のこ、ろにくれたけのまがれる癖はいつかつくらむ
村雲にあらぬものから世の中の風にうきたつひと心かな
のこしおきしふみとりいで、いさをある人の昔をしのぶ今日かな
なほざりに思ひしことも年をへておもひかへせばこひしかりけり
思ひいづることぞ多かるさま〴〵にかはりゆく世をへにし身なれば
葦原のみづほの國の萬代もみだれぬ道は神ぞひらきし

大演習のをりに

つはものゝ戰ふさまを見るほどは風の寒さもおぼえざりけり

觀艦式のかりに

はる〴〵と見わたす沖の波路までつらなりけりなわがいくさ船

ものごとにうつればかはる世の中を心せばくはおもはざらなむ

わが心われとをり〳〵かへりみよしらず〳〵も迷ふことあり

事しあらばわが力ともたのむべき人のをしくも老いにけるかな

くろがねの的いし人もあるものをつらぬきとほせ大和だましひ

國の爲つくさむ力ありながらたゝれずなりし人をしぞおもふ

明治四十二年

新年雪

新しき年のほぎごときゝながら花とちりくる雪をみるかな

立春日

ちはやぶる神路の山をいづる日の光のどけく春たちにけり

雨中鶯

鶯のこづたふこゑもしづかにて花のはやしにはるさめぞふる

春夜雨

ともし火の花さへ霞むこゝちして夜深きまどに春雨ぞふる

朝花

おきいでゝまづ見る花の下枝よりこてふも夢をさましてぞとぶ

池邊花

さく花の影うごくなり濱殿のにはの池水しほやさすらむ

閑居花

老人はおのが垣根の花を見て世には心もちらさゞるらむ

落花

世の人にめでらるゝまを時として風をもまたず花のちるらむ

夜落花

あかずして庭にたかする篝火のうへともいはずちる櫻かな

寄花祝

わが園の花のうたげにつどふ人としゞ〳〵おほくなるぞうれしき

折にふれて

春もやゝなかばになるを青森のあがたのふゞきはげしとぞきく

首夏雨

松の花ちりたる庭につゆみえてこさめ涼しくふるあしたかな

新樹

生垣のかなめの若葉あさつゆにぬれたる色は花におとらず

薔薇

村雨の露をふくみて花うばら匂ふかきねに朝風ぞふく

遠時鳥

ほとゝぎす雲のよそなる一聲はをちかた人や聞き定むらむ

深夜時鳥

しづかにも聞きさだめよとほとゝぎす夜深き空に鳴きわたるらむ

梅雨晴

めづらしといでゝ仰がぬ人もなし梅雨はれてのぼる朝日を

夕顔

しづがやのさまをうつして宮人がうゑて見せけり夕顔のはな

晩涼

おばしまの下ゆく水の音すみてすゞしき風のふくゆふべかな

露

ちりひぢのかゝる草葉にやどれども露の光はくもらざりけり

蟲

ひとりして靜かにきけば聞くまゝにしげくなりゆくむしの聲かな

籠中蟲

ところせきふせごの内に鳴くむしはえらばれたるや恨なるらむ

秋夜

秋の夜の長きを何にかこつらむなすべき事の多くある世に

對月

あきごとにむかふ心ぞかはりける月はむかしのひかりなれども

江上月

おほくらの入江のはちすかれはてゝ小波ひろくてる月夜かな

海上月

漁火のうすくなりぬとおもふまに波間はなるゝ月のかげかな

月前言志

わが心いたらぬくまのなくもがなこのよをてらす月のごとくに

神宮造營ありけるころ社頭月といふことを

この秋は内外の宮にてる月のかげいかばかりさやけかるらむ

千代ふべききくの籬におりたちて宴する日は物思ひもなし

菊

もみぢばの赤き心を靖國の神のみたまもめでゝみるらむ

社頭紅葉

月みればまづこそ思へ旅寐して近くむかひし山のけしきを

折にふれて

菊のはな机のうへにさしてみむそのふに遊ぶいとまなければ

この秋はいかなる野べに旅寐していくさならしのわざをみるべき

田家時雨

綿の實もやゝゑみそめて畑中のくぬぎの林色づきにけり

落葉

おほねほすしづが垣根の夕日影にはかにきえて時雨ふるなり

さしわたる日影にとくる朝霜のしづくと共にちる紅葉かな

落葉隨風　ふきさそふ風のゆくへをゆくへにて思はぬ方にちるもみぢかな

寒樹交松　山松のこのまに見ゆるかれ枝やうつくしかりし紅葉なるらむ

雪後雨　晴れて後みむと思ひし白雪をしくも雨のふりけたむとす

雪中松　としゞに雪をかさねて老松のみさを高くもなりまさりけり

雪中人來　盃をはやくとらせよふりつもる雪ふみわけて人のまねきぬ

雪中遊興　わらはべがつくりあげたる雪の山高き功を誰と定めむ

爐火　桐火桶かきなでながら思ふかなすきま多かるしづがふせやを

神樂　神ならぬ人の心もすむものは神樂のこゑをきく夜なりけり

冬天象　暑しともかついふばかりのどけきは小春のころの日和なりけり

冬晴　ひとしめりあらばといはぬ人ぞなき冬のひよりに物のかわきて

冬田　あぜみちは霜くづれして小山田にたつ人かげも見えぬ頃かな

冬鶴　霜をふむたづがねすなり九重の松ばら白く月さゆる夜に

日　さしのぼる朝日のごとくさわやかにもたまほしきは心なりけり

雲　あつまると見れば離るゝ大ぞらの雲にも似たるひと心かな

山　旅にいでゝまづうれしきは都にて見なれぬ山にむかふなりけり

波　しづかなるあしたに見ればわたの原渚にのみぞ波はよせける

河　國民もつねに心をあらはなむみもすそ川の清き流に

國　よきをとりあしきをすてゝ外國におとらぬ國となすよしもがな

家　ふりにきと人はいへどもはやくよりすめる家こそすみよかりけれ

別業　花紅葉うゑわたしたるなり所常にすまぬが惜しくもあるかな

柱　檀原のとほつみおやの宮柱たてそめしより國はうごかず

旅行　海くぬが軍のてぶりみるがうちに旅の日數はかさなりにけり

旅宿　せばしとも思はざりけり縣人こゝろづくしの旅のやどりは

羇中海　船にして昨日わたりし海原を山の上よりかへりみるかな

山家　おのづからたてるいはほを垣根にて庭おもしろき山のした庵

田家　田に畑に處ゆづりてしづがすむいほりちひさく見えわたるかな

和布　このわたり海士がとまやゝ近からむ眞砂の上にわかめほしたり

巖上松　あらし吹く世にも動くな人ごゝろいはほに根ざす松のごとくに

松經年　ちよへたる峯のたか松人ならばつめるいさをも多からましを

鳥　大空を心のまゝにとぶ鳥もやどるねぐらは忘れざるらむ

庭上鶴　うちつれて遊ぶあしたづ庭にしてすだちし雛やいづれなるらむ

書　呉竹のよゝのすがたをかきのこす書こそ國の寶なりけれ

手習　幼子がものかく跡をみてもしれ習へばならふしるしある世を

筆　をさな子が手にもあまれる筆とりてものかくさまのいつくしきかな

太刀　おのが身のまもり刀は天にますみおやの神のみたまなりけり

寶　世の中にひとりたつまでをさめえし業こそ人のたからなりけれ

船　あまの子が漕ぐや小舟の輕ければかへりて波もしづめざるらむ

述懷　沈むかとみれば浮びぬ波あらき磯こぎめぐる海士の釣舟

やき太刀のとつくに人にはぢぬまで大和心をみがきそへなむ

ひろき世にたつべき人は數ならぬことに心をくだかざらなむ

かたしとて思ひたゆまばなにごともなることあらじ人のよの中

戰のかちにほこりてむらぎもの心ゆるぶなわがいくさびと

寄道述懷　ふむことのなどかたからむ早くより神のひらきし敷島の道

寄草述懷　野末まで種をまかなむ教草いまだしげらぬ方もこそあれ

寄書述懷　すゝみゆく世におくれなばかひあらじ文の林はわけつくすとも

述懷多　ひらくれば開くるまゝにいにしへにかはるおもひもある世なりけり

老人　ものわすれするを常なる老人も昔がたりはたがへざりけり

子　いつはりの世をまだしらぬ幼子が心や清きかぎりなるらむ

教育　たゞしくも生ひしげらせよ教草をとこをみなの道を別ちて
　　吳竹のなほき心をためずしてふしある人におほしたてなむ
心　ことなしとゆるぶ心はなか〳〵に仇あるよりもあやふかりけり
　　ともすれば思はぬ方にうつるかなこゝろすべきは心なりけり
遠情　樺太にうつりし民も年を經て今はすみうく思はざるらむ
遊戯　世わたりの道のつとめに怠るな心にかなふあそびありとも
宴　たまだれの内外の臣をつどへつゝうたげする日ぞ樂しかりける
祝言　なりはひをたのしむ民のよろこびはやがてもおのがよろこびにして
　　まじはりをむすぶ國々よろこびをいひかはす世ぞ嬉しかりける
寄道祝　かみつよのあとにならひて敷島の道をぞ祝ふ年のはじめに
社頭松　かみぢ山松の梢にかゝりけり天つみそらの雲のしらゆふ
神祇　神風のいせの宮居のみや柱たてあらためむ年はきにけり

仁　いつくしみあまねかりせばもろこしの野にふす虎もなつかざらめや
義　身にあまるおも荷なりとも國の爲人のためにはいとはざらなむ
　　おのが身はかへりみずして人のため盡すぞひとの務なりける
誠　鬼神もなかするものは世の中の人のこゝろのまことなりけり
折にふれて　新高の山のふもとの民草も茂りまさるときくぞ嬉しき
　　天をうらみ人をとがむることもあらじわがあやまちを思ひかへさば
　　いたづらに時を移してことしあればあわたゞしくもたちさわぐかな
　　おいぬれど國の力とならむ人すくよかにこそあらまほしけれ

明治四十三年

新年雪　田に畑に雪ぞつもれる民の爲ゆたかにと思ふ年の始に
新年宴會　新しき年のうたげのにはもせにつどへる人を見るがうれしさ

萬物感陽和　草も木も萠ゆるをみれば春風に動かぬものはなき世なりけり
摘若菜　しづのめをしるべにはして宮人も田中のあぜの若菜をぞつむ
雨中梅　しめやかにのきばの梅のかをりきて雨さむからずなれる春かな
海邊春草　若草も浦のなぎさにおひにけり波のうちあげしのりにまじりて
朝春雨　あさがらす鳴きたつこゑも靜かにて春雨くらし松のした庵
月前花　春の夜の月はまどかになりぬるを惜しくも花のさかりすぎたる
折花　一枝を折りてかへりぬ山櫻ともなはざりしひとに見せむと
月前卯花　卯花にくらべて見れば夕月の光はくらし木がくれのには
橘　たちばなの花をし見ればまきもくの珠城の宮ぞしのばれにける
桐花　さるかたにおもしろきかな山里の桐のはやしの花のさかりも
夏庭　鳴く蟬の聲ばかりしてひざかりは庭木のうへをとぶ鳥もなし
夏蟲　いづかたにこゝろざしてか日盛のやけたる道を蟻のゆくらむ

夏夢　山かげの清水むすぶとみし夢はさめての後も涼しかりけり
秋夜思鄕　山城のみやこの空にてる月をおもひぞいづる秋のよな〳〵
月前雲　てる月にかゝらむばかり近づきぬはるかにみえし雲のひとむら
湖上月　ひがひとる船もみえけりさゝ波の志賀のうらわの秋のよの月
高樓觀月　海山をにはとみなせる高殿の窓にさし入る秋のよのつき
月前遠情　あた波をうちしりぞけしいくさ人南の島の月やみるらむ
待紅葉　菊の花人に見すべくなりぬるをまだ色うすし庭のもみぢ葉
秋晴　水こえし里のしめりけかわくべく秋のみそらよ晴れつゞかなむ
秋旅　をしねほすしづが垣根をみつゝゆく秋の旅路のこゝちよきかな
折にふれて　つくゞ〳〵と月にむかひて思ふかな水にひたりし里のよさむを
社頭冬月　御神樂の庭火のかゞり影ふけて廣前しろく月のてりたる
遠千鳥　波のうへにむれたつかげはみえながら沖の千鳥の聲はきこえず

暮山雪　ゆふづゝのかげこそみゆれ雪の色はまだくれはてぬ山のかひより

海邊雪　波のうへに富士のね見えて呉竹のはやまの浦の雪はれにけり

雪中松　おりたちてとくうちはらへ枝よわき小松のうへに雪のつもれる

狩場風　かり人がいまひとよりときほふ野に木立ゆすりて嵐ふくなり

冬夜　文机にかざれる玉の光まで寒くぞ見ゆる霜さゆる夜は

風　なにとなく人の心もさわぐかな空ふく風のしづまらぬまは

雲　山かぜにふきたてられて谷底にしづみし雲もまたおこりけり

朝　世の中のことまだ聞かぬあしたこそ人のこゝろはしづけかりけれ

夕　暮れぬべくなりていよ〳〵惜むかななすことなくて過ぎし一日を

野　にひばりの畑も田のもゝおほけれどひなは荒野のなほひろくして

道　あまた度通ひなるれば遙かなる道も遠しと思はざりけり
いとまなき身も朝夕にいそしみぬ思ひいりたる道の爲には

石　國民がこゝろ〴〵に進みゆく道にはさはるものなくもがな

水　ならび行く人にはよしやおくるともたゞしき道をふみなたがへそ

水聲　みがゝれて光そひゆく石をしも昔の人は見しらざりけむ

島　みなもとは清くすめるを濁江におちいる水のをしくもあるかな

國　近からぬ水のひゞきもきこえけりふけしづまれるよはの寢覺に

餞別　ちかづけば家もありけり波の上に浮ぶとみえし沖の小島も

旅宿雨　おごそかにたもたざらめや神代よりうけつぎ來たるうらやすの國

旅宿朝　したしみをよもに結びて旅衣かへりこむ日をいまよりぞ待つ

旅宿夢　草枕たびのやどりに着きて後うれしく雨はふりいでにけり

羇中思都　このゑ人こまひきいづる音すなり朝だちすべき時やきぬらむ

あすもとく軍ならしのさまみむと思へば夢のさめがちにして

旅寐するうまやにつきて待つものは都の今日のたよりなりけり

牛夜旅泊

あけわたる湊の山も見るべきを夜深くとくか船のともづな

山家人稀

山みちはゆきあふひともなかりけりところ〴〵に家はみゆれど

深山木

しら雲のはれま稀なるおく山は老木ならぬも苦むしにけり

書

思ふことしげからざりしそのかみによみつる書は忘れざりけり

いそのかみふるごとぶみは萬代もさかゆく國のたからなりけり

文

吳竹の世々につたへて仰ぐかな遠つ御祖のみことのりぶみ

詞

みじかくてことの心のとほりたる人のふみこそ讀みよかりけれ

筆

きゝしるはいつの世ならむ敷島のやまと詞の高きしらべを

寶

千年まで殘らむ筆の跡なるを走りがきのみせられけるかな

玉

あまてらす神のさづけしたからこそ動かぬ國のしづめなりけれ

人みなのえらびしうへにえらびたる玉にもきずのある世なりけり

寶ともいふべき玉はなくならむこまかに瑕をもとめいでなば

鏡

しら玉を光なしともおもふかな磨きたらざることを忘れて

車

世の中の人のかゞみとなる人のおほくいでなむわが日の本に

船

くつがへることもこそあれ小車の進むにのみはまかせざらなむ

燈

ふなづくりたくみになりて波の底かよふ道をもひらきつるかな

述懷

軒ごとにかけつらねたるともしびやにぎはふ市の光なるらむ

をさめしる國のはてまでしらせばや民安かれと思ふこゝろを

むらぎもの心にたえずおもふことなしとげし日ぞうれしかりける

おのが身はかへりみずしてともすれば人のうへのみいふ世なりけり

曉述懷

あかつきのねざめ〳〵に思ふかな國に盡しゝ人のいさをを

人

をちこちにわかれすみても國を思ふ人の心ぞひとつなりける

老人

をさな子にひとしくなれる老人をいたはることをゆるかせにすな

おとろへしさまは見えねどおいびとの涙もろくもなりまさりぬる

子　からくして歩みはじめし人の子のひとりたつ身といつかなりなむ

兄弟　ならびたつたけはひとしく見えながらこのかみは猶このかみにして

工　外國におとらぬものを造るまでたくみの業にはげめもろ人

海人　あびきする親に力をそふるかな海士が子どもは幼けれども

外客　海こえてはる〴〵來つる客人にわが山水のけしき見せばや

教育　わがしれる野にも山にもしげらせよ神ながらなる道をしへぐさ

心　ひろき世にまじはりながらともすれば狹くなりゆく人ごゝろかな

夢　たらちねの親のみまへにありとみし夢のをしくも覺めにけるかな

夢與故人談　面影のなほこそのこれいにしへの人とかたりし夢はさめても

披書思昔　かきいれし昔の人の筆のあとのこれる書のなつかしきかな

思往事　いにしへは夢とすぐれどまことある臣のことばゝ耳にのこれり

わが爲に心つくして老人がをしへしことは今もわすれず

神祇　わが國は神のするなり神祭る昔の手ぶり忘るなよゆめ

寄神祝　とこしへに國まもります天地の神の祭をおろそかにすな

寄國祝　あまてらす神の御光ありてこそわが日のもとはくもらざりけれ

仁　萬民こゝろあはせて守るなる國にたつ身ぞ嬉しかりける

忠　ちよろづの民の心ををさむるもいつくしみこそ基なりけれ

樂　まめやかにつかふる臣のあればこそわがまつりごとみだれざりけれ

折にふれて　千萬の民と共にもたのしむにます樂はあらじとぞおもふ

さだめたる國のおきてはいにしへの聖の君のみこゝろなりけり

さま〴〵の世のたのしみも言のはの道のうへにはたつものぞなき

ものごとに進まずとのみ思ふかな身のおこたりはかへりみずして

空蟬の世のことわざはしげくとも物學ぶまのなかるべしやは

きくたびにゆかしきものはまつりごと正しき國の姿なりけり

扨にふれて　新高の山よりおくにいつの日かうつしうゝべきわがをしへぐさ
敷島のやまとしまねのをしへぐさ神代のたねの殘るなりけり
思ふことなるにつけてもしのぶかなもとる定めし人のいさをを
みち〳〵につとめいそしむ國民の身をすくよかにあらせてしがな
ひと筋をふみて思へばちはやぶる神代の道もとほからぬかな
おもふこと思ひ定めて後にこそ人にはかくといふべかりけれ

明治四十四年

月前霞　つねよりも大空とほきこゝちして霞のおくに見ゆる月かな
旅宿鶯　鶯のおどろかすこそ嬉しけれ旅につかれし春のねぶりを
雲雀　つぎ〳〵にあがるをみれば雲の上に入りしひばりや友をよぶらむ
待花　たゞひと日あたゝかなれば櫻花さきもやするとまもらるゝかな

花便　うたげせむ日を定めよと濱殿の花のたよりのたえぬ頃かな
月前花　朧夜の月はさすともみえなくに窓にうつれる花のかげかな
田家花　みる人はなきものにしてしづがやの籬の花は咲きならひけむ
見花　もゝちゞの人をつどへて濱殿の花みてあそぶ春ぞ樂しき
月前落花　なつかしき朧月夜のかげふみてたゝずむ袖にちる櫻かな
舟中落花　ちる花をのせてかへりぬ渡舟むかひの岸に人はおろして
春日　すがのねのながき春日はなか〳〵にものに怠る人ぞおほかる
春故郷　あをによし奈良の都の跡とへば若草山にかすみたなびく
待時鳥　都にはまつ人おほしほとゝぎすひとたび山をいでゝなかなむ
月前時鳥　梅雨の雲間の月をめづらしと仰ぐみそらになく時鳥
折にふれて　たづねても尋ねえざりし早蕨の廣葉しげくもみゆるのべかな
早涼　小山田はまだみのらずときくものをあまり涼しくなれる秋かな

蟲聲非一　さま〴〵の蟲のこゑにもしられけりいきとしいける物のおもひは
蟲聲欲枯　かれ〴〵になりぬる庭の蟲のねはなかぬ夜よりもさびしかりけり
月夜燈　よひやみをてらし丶庭のともしびの影もうすれぬ月の光に
遠見鴈　このわたり聲をのみてやすぎつらむはるかにみゆる鴈のひとつら
紅葉　うつろひて散らむとすなるもみぢ葉をうつくしとのみ思ひけるかな
山紅葉　山みちをゆく〳〵みれば都よりまされるものは紅葉なりけり
夜木枯　大空の星のはやしも動くかと思ふばかりにこがらしの吹く
社頭冬月　さしわたる霜夜の月に冬がれぬ榊もしろし神のひろまへ
千鳥　川ぞひのもりの夜嵐なぎぬらし遠き千鳥のこゑのきこゆる
行路雪　重荷おひてゆく人いかになやむらむふゞきになりぬのべの通ひ路
雪中早梅　ふりつもる雪をしのぎて咲く梅の花はいかなるちからあるらむ
寒月照梅花　てる月の光はいまだ寒けれど春にかはらぬ梅が香ぞする

河　岩がねをきりとほしても川水は思ふところに流れゆくらむ
海邊興　わたつみの神祭るらし海士の子がふなばた敲きうたふ聲する
國　天つ神定めたまひし國なればわがくにながらたふとかりけり
　世はいかに開けゆくともいにしへの國のおきてはたがへざらなむ
故郷水　思ひいづることのみ多し故郷のこだちももとの木立ならねど
羇中情　ゆくところ野にも山にも國民のむかふる見ればうれしかりけり
田家雨　軒あさきしづがふせやは降る雨もたゝみのうへにうちしぶくらむ
庭上松　榮えたる一木の松にもとづきてつくれる庭のおもしろきかな
鳥　うちつれて渡るをみればとぶ鳥もおもひ〳〵の友ぞあるらし
馬　水をさへみづからかひてものゝふは手馴の駒をいつくしむらむ
筆　ともすれば走りがきしてわがとりし筆の跡さへ見わけかねつゝ
太刀　眞心をこめて錬ひしたちこそは亂れぬくにのまもりなりけれ

漁火
電燈
雨後眺望
民
筆寫人心
披書知昔
神祇
折にふれて

漁火のかげぞつらなる暮れぬまはまばらに舟の見えし波間に
あきらけき火影ひきたる庭みれば雨はふりながら月夜なりけり
雨雲の風にきえゆく山のはにあらはれそめぬ松のむらだち
千萬のたみのちからを集めてぞ國はゆたかになすべかりける
鏡にはうつらぬひとのまごゝろもさやかに見ゆる水莖のあと
よむふみのうへに涙をおとしけり昔の御代のあとをしのびて
いつはらぬ神のこゝろをうつせみの世の人みなにうつしてしがな
千早ぶるかみの力によりてこそわれをたすくる人もいでけれ
むらぎもの心つくして縣守あをひと草をおほしたてなむ
きくにまづ身にぞしみける誠よりいふことのはゝ長からねども
思ふことといふべき時にいひてこそ人のこゝろもつらぬきにけれ
たらちねの親のをしへは誰もみな世にあるかぎり忘れざらなむ
まごゝろをこめてならひし業のみは年を經れどもわすれざりけり
教草しげりゆく世にたれしかもあらぬ心の種をまきけむ
いそのかみ古きてぶりをのこさなむ改めぬべきこと多くとも
むらぎもの心のかぎりつくしてむわが思ふことなりもならずも

明治四十五年

始聞鶯
山鶯
折梅
春曉月
故郷春雨
花

ひとりしてうちゑまるゝは鶯のはつねきゝつるあしたなりけり
しづかなる所えたりとうぐひすもみやまがくれの花になくらむ
わがめづるうめを折らせつたれこめてありといふなる人に見せむと
あけがたの霞のうちにいつとなく消えゆく月の影のしづけさ
燕だにとはずなりぬる故郷のかやがのきばに春雨ぞふる
ありとある人をつどへて春ごとに花のうたげをひらきてしがな

遠尋花　荒駒をならしがてらに野邊とほく櫻狩するますらをのとも
雨後花　しづかにもそゝぎし雨はうちはれてたわめる花に夕日さすなり
夜思花　ふく風の音をきくにもおもふかなあすうたげせむ花はいかにと
庭花　九重の庭木のさくらさきにけり野山の春もさかりなるらむ
花似雲　枝ながら風にゆらるゝ櫻花たゞよふ雲にかはらざりけり
見花　司人さゝぐるふみも讀みはてゝゆふべしづかに花を見るかな
　　まつりごときゝをはりたるゆふべこそおのが花みる時にはありけれ
　　高殿の窓てふまどをあけさせてよもの櫻のさかりをぞみる
折花　人ごとにをりて來つれば櫻花さしたる瓶ぞおほくなりぬる
依花待人　あがたよりいでこむ人をまちてのち花の宴の日をばさだめむ
花未飽　うつろへばうつろふまゝになつかしと思ふは花のいろ香なりけり
行路落花　乘る駒に小草はませてやすらへば鞍のうへ白く花ちりかゝる

菜花　花瓶にさしてぞ人のすゝめける鈴菜もいまだめづらしければ
水邊首夏　燕とぶ山澤水にふぢなみの花ちりうきて夏はきにけり
新竹　みるたびに高くなりぬる若竹はいまぞ生ひたつさかりなるらむ
時鳥一聲　二聲となかぬぞをしき時鳥きかせまほしき人のおほきを
時鳥稀　いかならむ山にかくれて時鳥たまさかにのみ世にはいづらむ
杜時鳥　小麥かる人やきくらむほとゝぎす野中の森をいづるひとこゑ
樹陰夏月　風ふけば露もおちくる松かげに月をみる夜ぞ涼しかりける
夏風　をり〳〵に庭の草木はうごけども涼しき風の窓に入りこぬ
夏山　山近くすみし都をなつかしとさらにぞ思ふ夏の來ぬれば
夏瀧　いはまより瀧のおちくるこの庭は山ならねども涼しかりけり
雲　一村と思ひし雲のいつのまにあまつみそらをおほひはてけむ
雨　田も畑もうるほふほどをかぎりにて晴れにし雨はうれしかりけり

道

すゝむにはよし早くともあやふしと思ふ道には入らずもあらなむ
ともすればさまたげられて一筋にゆかれぬものは道にぞありける
人の世のたゞしき道をひらかなむ虎のすむてふのべのはてまで
きゝしより遠しと思ふはゆくさきに心のいそぐ道にぞありける

河

あさしとて心ゆるすな雨ふればとみにあふるゝ山川のみづ
さまゞ〳〵の舟のかよひて隅田川みづのうへさへ賑しきかな

海

なぎぬればかくもなぎけり島山もこゆべくみえし沖つしらなみ

國

まつりごとよこしまならぬ國にこそさかしき人も多くいでけれ

柱

かりそめの事に心をうごかすな家の柱とたてらるゝ身は

旅

百年を經たる人をも見つるかな車とゞむるところ〴〵に
かなし子をたびにぞいだすあまざかるひなの手振をしらしめむとて

山家雲

白雲の軒端にまよふ山里は雨ふらぬ日もうちしめるらむ

濱松

あしたづの舞子のはまの松原は千代をやしなふ處なりけり

林鳥

村鳥のねぐらあらそふ夕暮は林のかげもさわがしきかな

鶴

ひなをさへおほしたてけり早くよりかひならしたる庭のあしたづ
親のゆくあとをしたひてひな鶴も庭のをしへやふみはじむらむ

松上鶴

朝づく日とよさかのぼる山松の梢をしめてたづぞ鳴くなる

鶏

人はみな野にいでははてししづが屋にひとりのこりてには鳥のなく

馬

鞭うつもいたましきまで早くよりならしゝ駒の老いにけるかな

書

ひもとかむ暇なき日のおほきかな讀むべき書はあまたあれども

管絃

絲竹のしらべたへなる聲にこそ人の心もやはらぎにけれ

錦

とつくにの人に見すべきしきしまの大和錦をおりいださなむ

河舟

はたつものつみいだすらむ里川につなぐ小舟のおほく見ゆるは

樵夫

老の坂こえにけりとも見えぬかな眞柴になひてくだるきこりは

教育

よきたねをえらび〳〵て教草うゑひろめなむのにもやまにも

心

いかならむことある時もうつせみの人の心よゆたかならなむ

讀故人書

わがためにかきのこしたるひと卷の書こそ人のかたみなりけれ

思往事

雪ふれば駒にくらおき野に山に遊びし昔おもひいでつゝ

神社

いにしへの姿のまゝにあらためぬ神のやしろぞたふとかりける

孝

いとまなき世にはたつともたらちねの親につかふる道な忘れそ

身

心からそこなふことのなくもがな親のかたみと思ふべき身を

折にふれて

敷島のやまと心をみがけ人いま世の中に事はなくとも

おのづからわが心さへやすからず鄰のくにのさわがしき世は

思はざることのおこりて世の中は心のやすむ時なかりけり

身をすてゝいさををたてし人の名は國のほまれと共にのこさむ

國民の業にいそしむ世の中を見るにまされる樂はなし

あやまたむこともこそあれ世の中はあまりにものを思ひすぐさば

開くべき道はひらきてかみつ代の國のすがたを忘れざらなむ

くにを思ふ臣のまことは言のはのうへにあふれてきこえけるかな

しる人の世にあるほどに定めてむふるきにならふ宮のおきてを

敷島のやまと心をうるはしくうたひあぐべきことのはもがな

おもふこと思ふがまゝにいひてみむ歌のしらべになりもならずも

なすことのなくて終らば世に長きよはひをたもつかひやなからむ

附載

世を治め人をめぐまば天地のともに久しくあるべかりけり

右明治二年八月三日右大臣三條實美を以て英國皇子に贈りたまへる

祝

附載

附載

冬眺望

見わたせば波の花よる隅田川ふゆのけしきもこゝろありけり

右明治六年十二月十九日隅田川筋行幸のをりに正二位松平慶永の邸に立寄らせたまひてあくる年二月十三日に下し賜へる

冬眺望

いつみてもあかぬけしきは隅田川なみぢの花は冬もさきつゝ

右おなじ折に從二位伊達宗城の邸に立寄らせたまひてあくる年二月十三日に下し賜へる

櫻

花ぐはしさくらもあれどこのやどの代々のこゝろをわれはとひけり

右明治八年四月四日從四位德川昭武の邸に行幸ありて五月五日に下し賜へる

見花

みわたせばつらなる櫻さきみちて朝日に匂ふ春のたのしさ

右おなじ日に從一位德川慶勝の邸に行幸ありて五月七日に下し賜へる

水邊藤

池水にかげをうつせる藤波の花の盛のおもしろきかな

ゆきかふ舟を見て

うちかすむ梢がくれをかよふなりこの船いかにのどけかるらむ

右二首明治八年五月四日熾仁親王の芝離宮にいましけるころ行幸ありて當座によませたまへる

夏草露

言の葉もともにしげりし夏草の露と消えても名はのこりけり

右八田知紀三年祭歌會兼題をきこしめして明治八年八月九日侍從番長高崎正風に下し賜へる

壇浦懐古

豊浦がた千船もゝふねいりみだれ波にしづみし昔をぞ思ふ

右長門國赤間宮の歌會のことをきこしめして明治九年九月廿一日從三位毛利元德に下し賜へる

園深菊香

けふこゝにわが來て見れば園のうちの菊のかをりも心あるかな

附載

附載

右明治九年十月十三日從一位中山忠能の邸に行幸ありて當座に
よませたまへる

くりかへしふみ見ざりせば天の下をさむる道もいかでしらまし

右墺地利國公使のこひによりて明治十年一月廿日宮内卿德大寺
實則をもて下し賜へる

梅雨欲晴

をやみなく降りつゞきたる梅雨のながめもけふは晴れむとすらむ

右明治十年京都に行幸ありけるほど六月十八日修學院離宮鄰雲
亭にて當座によませたまへるを同地在住の華族に下し賜へる

太政大臣三條實美のたてまつりしたきものをめでゝ

九重の雲ゐに匂ふたきものゝかをりにきみが心をぞしる

右明治十一年一月十日下し賜へる

庭の木々にさもしびをかけたるを見て

かぎりなくかけつらねたる燈火のうつるもすゞし庭のいけみづ

右明治十二年八月十八日右大臣岩倉具視の邸に行幸ありてよま
せたまへる

犬追物を見て

いにしへの山井のはまての跡おひて弓矢とる身の勇ましきかな

右明治十二年十一月廿七日吹上御苑にて犬追物みそなはしてよ
ませたまへるを從三位島津忠義に下したまへる

寄竹祝

こゝのへのうてなの竹の千代かけてさかえむ世こそたのしかりけれ

右明治十八年二月二十四日晃親王七十の賀に下し賜へる

侯爵鍋島直大の邸に行きけるをり三階より海のけしきをみて

高殿にのぼればすゞし品川のおきもまぢかく月に見えつゝ

右明治二十五年七月九日よませたまへる

附載

附載

京都の内庭の稚松をいにし年山縣有朋につかはしけるにかく

生ひしげりたりとてその寫眞を見せければ

おくりにし若木のまつのしげりあひて老の千歳の友とならなむ

右明治三十四年十一月元帥侯爵山縣有朋にくだし賜へる

明治天皇御製集　卷下

新年勅題

春風來海上　明治二年

千代よろづかはらぬ春のしるしとて海邊をつたふ風ぞのどけき

春來日暖　明治三年

吹く風ものどかになりて朝日かげ神代ながらの春をしるかな

貴賤迎春　明治四年

治まれる世々のためしを都人ひなもろともにいはふ春かな

新年勅題

新年勅題

新年祝道　明治六年

年たちていはふにいとどすぐなれとわがよの道をおもひけるかな

迎年言志　明治七年

いはふぞよつかふる人もほど〳〵の道にたがはぬ年の始を

都鄙迎年　明治八年

都にもとほき里にもあたらしきおなじ年をばうちむかへつゝ

松不改色　明治十年

ふかみどり色もかはらぬ松が枝のときはかきはのすゑいはふなり

四海清　明治十六年

沖つなみよりくる舟もとし〴〵に數そふ世こそたのしかりけれ

新年梅　明治卅五年

たちかへる年の朝日にうめの花かをりそめたり雪間ながらに

新年海　明治卅六年

梓弓やしまの外もなみ風のしづかなるよのとしたちにけり

新年河　明治卅九年

あら玉の年立ちかへるかはなみにしめかざりせし舟も見えけり

社頭松　明治四十一年

常磐なる松こそたてれうごきなき國をしづめの神のやしろに

明治七年

明治七年一月二十七日招魂社にいたりて

我が國の爲をつくせるひと〴〵の名もむさし野にとむる玉垣

國のため心つくしゝ高山のいさをむなしくはてしあはれさ

高山正之

明治十四年

明治七・十四年

明治十六・十七・二十三年

孔明　たつのふす岡のしらゆきふみわけて草のいほりをとふ人やたれ

右明治神宮寶物殿にて拜寫

明治十六年

海上霞　かぎりなき大海原のなみの上にたなびきわたるはる霞かな

朝聞鶯　けさはまたいづこの梅にやどるらむ遠くきこゆる鶯のこゑ

家雪　足曳の山田のいほの竹柱かたぶくばかりつもる雪かな

明治十七年

寒夜衾　冬深きねやのふすまをかさねてもおもふはしづが夜寒なりけり

明治二十三年

○　なる神のおともはげしくあめふりてへさきのなみに夜をあかすかな

右四月佐世保行幸の際筑前國邊崎沖に御假泊の折よませ給へる

明治二十九年

樹陰夏月　しげりあひて木のしたくらき夏の夜は月のためにも風ぞまたるゝ

庭上鶴　九重の雲井のにはのひろければはなたぬ田鶴もすみなれにけり

深山猿　子をつれて遊ぶをみれば山猿のこゝろも人にかはらざりけり

明治三十六年

馬　とりぐ〜にいさむ若駒いづれをかわが厩にはひかむとすらむ

明治三十七年

明治二十九・三十六・三十七年

水邊瞿麥　よる波にうちあげられて伏しながら花咲にけり河原なでしこ
夏灯　のき近くかけつらねたるともしびのまたゝくほどの風だにもなし
折にふれて　ひるもなほ蚊のこゑしげし竹むらのかげのあづまやすゞしけれども
馬上聞蟬　日をさけて松の木立をゆく駒の上になきたつせみのこゑかな
夏夢　ぬばたまの夢にふたゝびむすびけり涼しかりつる松の下水
曉更鷄　そらねかと思ふばかりに夏の夜のあけがたはやく鷄が音ぞする
夏星　星のとぶかげのみ見えて夏の夜もふけゆく空はさびしかりけり
行路蟬　風わたる木かげをかよふ小車のとまれば蟬のこゑきこゆなり
水邊夏草　ゆく水はてる日にかれていさゝ川風に波よるすゝきかるかや
池夏風　池水のみぎはふきこす朝風にはちすの花のちるもみえつゝ
松上蟬　なくせみのこゑばかりして吹く風のおとは絶えたり岡の松原
竹風涼　文机のうへに夜露もちりそめて涼しくなりぬ竹の下風

行路夕立　雨ぎぬをかくるまもなくゆく人のくるまにかゝる夕立の雨
海上夕立　和田の原おひてをうけてゆく船の片帆にかゝる夕立の雨
旅宿夕立　野道にてゑはざりしこそうれしけれ旅のやどりにかゝる夕立
夜述懷　夏の夜もねざめがちにぞあかしける世のためおもふこと多くして
秋川　おち鮎のながるゝみえて桂川すみまさりゆく水の色かな
鄰朝顏　いづれより種はまきけむ中垣のうらおもてなく咲ける朝顏
祝言　うけつぎし國の柱のうごきなく榮えゆく世をなほいのるかな
披書思昔　しばらくは幼心にかへりけりよみならひにし書をひらきて
老人　杖つきて道ゆくまでに老いし身もむかしたづぬる栞とぞなる
兄弟　つく杖にすがるともよし老人のちとせの坂をこえよとぞおもふ
子　千代よばふ聲ぞにぎはふ山松のつらなる枝のひろきそのふに
　思ふことつくろふこともまだしらぬ幼心のうつくしきかな

心　ともすればかき濁しけり山水のすませばすます人の心を
太刀　あだし野にいざかゞやかせますらをがとぎすましたる太刀の光を
剣　ますらをがつねにきたひし剣もてむかふ醜草なぎつくすらむ
軍刀　きたひたる剣の光いちじるくよにかゞやかせわがいくさ人
詞　言の葉の花の色こそかはりけれおなじ心のたねときけども
鏡　うちむかふたびに心をみがけとや鏡は神のつくりそめけむ
玉　くもりなき心のそこのしらるゝは言葉の玉のひかりなりけり
團扇　あをによし奈良のうちはは都にてありし時にやつくりそめけむ
寶　おのがじし力盡して世をとます民こそ國の寶なりけれ
家　ことそぎし昔の家のつくりざまいまも田舍にのこりけるかな
時計　時はかる器の針のともすればくるひやすきは人のよの中
筆　國のためふるひし筆の命毛のあとこそのこれよろづよまでに

藥　へだてなく惠のつゆをかくるこそ青人草のくすりなりけれ
駒　つはものゝ心とともにのる駒もつかるゝしらでいや進むらむ
蝸牛　さゝやかにみゆる家居も蝸牛ひとりすむには事たりぬべし
船中見島　うしろにはいつなりにけむ漕ぐ舟のゆくへ遙かにみえし島山
松　雲のうへにたち榮えたる山松のたかきにならへ人のこゝろも
孤島松　波たかき沖の小島のひとつ松いつの世にかも根ざしそめけむ
夕眺望　夕やけの空のけしきぞうるはしきみどりはてなき松原の上に
故郷庭　池水に小舟うかべてあそびつる昔こひしきふるさとのには
旅泊重夜　波風のあらしといひて今宵またおなじみなとにうき寢をぞする
折にふれて　ひらけゆく道にいでゝも心せよつまづくことのある世なりけり
國民の力のかぎりつくすこそわがひのもとのかためなりけれ
白露のおきふしごとに思ふかな民の草葉のさかゆかむ世を

折にふれて　端居して月みるほどもたゝかひのにはのありさま思ひやりつゝ
いさみたつ心の駒をひきとめていたでおふ身やわびしかるらむ
若竹の生ひゆくすゑをおもふ世ににはの教をおろかになせそ

明治三十八年

寄國祝　定めにしそのはじめより葦原のくにのさかえは神ぞ守るらむ
寄道述懐　よの中にあやふきことはなかるべし人の人たる道をふみなば
歌　なか〳〵に深き心のみゆるかなはかなしと思ふ言の葉草に
親　たらちねの親の心は誰もみな年ふるまゝに思ひしるらむ
馬　戰のいとまある日はいくさ人手馴の駒をいつくしむらむ
手習　竹馬にこゝろの乘りて手習におこたりしよをいま思ふかな
松　雪にたへ嵐にたへしのちにこそ松の位もたかく見えけれ

折にふれて　つねに身のやしなひ草をつみてこそ人のよはひはのぶべかりけれ
かちどきのひゞくにつけて村肝の心たゆむなわがいくさ人

明治三十九年

草　うつせみの世にたつほどは夏草のことしげくともいとはざらなむ
神祇　ためしなくひらけゆく世をみることもみちびく神のませばなりけり
世の中にことあるときぞよをまもる神のみいつはあらはれにける
師　しるべする人なかりせばいかにして我がこゝろざす道にいるべき
民　もろともにたすけあひつゝ國民のむつびあふ世ぞたのしかりける
武　弓矢もて神のをさめし國人はことなき世にもこゝろゆるぶな
教育　ともすればあらぬ方にとふみまよひをしへがたきは人の道なり
歌　まごゝろを限りなき世にとゞむるもやまと詞のいさをなりけり

歌詞

すなほにてをゝしきものは敷島のやまと詞のすがたなりけり

言の葉の道をや神のひらきけむ人の心をなぐさめよとて

道

のぼるかとみればくだりてたはやすくすゝみがたきは敷島の道

折にふれて

よの人ををしふることもかたからむみのおこなひのたゞしからずば

明治四十年

折にふれて

敷島の道をことしも祝ふかな民のことばをあまたあつめて

渓新樹

花どきは寒しといひてとはざりし渓の櫻もわかばさしけり

夏夕

庭草に水そゝがせて月をまつ夏のゆふべはおもふことなし

夏氷

厚氷もちはこぶまにとけぬらむ盛りし器に水のたまれる

夏鳥

遣り水につばさあらひて日ざかりは鴉も庭をあさらざりけり

田家夏月

瓜畑におりたつ人もみゆるかなしづが垣根の夏の夜の月

新秋雨

露だにもいまだむすばぬくさむらにひとむらそゝぐ雨のすゞしさ

海上霧晴

おとばかりきこえし波のみえそめつ浦曲のさ霧はれわたるらむ

野月露深

おく露の光りになりてふけにけり花野のするの秋の夜の月

垣秋風

枯れ蔓もいまだはらはぬ朝顔の垣根ゆすりてあきかぜぞふく

野月

松原もをぐらくなりて秋の野の尾花がするに月かたぶきぬ

田家霜

しづが家の軒端にたかくつみあげし新藁しろく霜ふりにけり

神祇

朝な〳〵みおやの神にいのるかなわが國民を守りたまへと

天

かぎりなきあまつみそらを心にておもひのどめむ世のなかのこと

寄山述懐

久方の空にはれたるふじのねのたかきを人の心ともがな

人

人は只まことの道をまもらなむたかきいやしきしなはありとも

さかしきも愚もあれど人ごとにもたまほしきは誠なりけり

親

一人たつ身となりし子ををさなしと思ふや親の心なるらむ

子　難波江のそのよしあしもまだしらぬをさな心や誠なるらむ

民　千萬の民よ心をあはせつゝ國にちからをつくせとぞおもふ

友　あやまちをいさめかはしてしたしむが誠の友の心なるらむ

思往事　たらちねのみおやのみよは白雲の四十路のよそになりにけるかな

手習　幼子がならへばならふほどみえてきよくなりゆく水ぐきの跡

歌　事もなくしらべあげたる言の葉の花にぞ匂ふ國のすがたも

現身の人のまことを萬代にのこすや歌のしらべなるらむ

言の葉につらねられぬぞくちをしき心に思ふことはあれども

寄道述懐　ふむ人はあまたあれども言の葉の道の高根はたれかこゆらむ

瓦　年の名をしるす瓦にいにしへの家づくりこそ思ひやらるれ

柱　眞木柱たてし心をうごかすなよには嵐のふきすさぶとも

水　くろがねの船もたやすく動かしてつよきは水の力なりけり

竹　石垣のひまに生ひたる吳竹は千代をつらぬく根ざしなるらむ

海上雲遠　笛となり弓矢となりてくれたけのよはさまぐにかはりゆくかな

社頭水　遠山のあらはれたりと思ひしは沖にうかべる雲にぞありける

折にふれて　まうで來る人のこゝろを洗ひけり御手洗川の水のしら波

ともすれば人を遲しと思ふかな身のおこたりはかへりみずして

國民の上も心にまかせぬは雨と嵐のうれひなりけり

明治四十一年

砂月涼　すゞしくも月の光になりにけり波のあらひしはまのまさごぢ

夏庭　きのふかも切りおろしつる我が宿の庭木の枝はまたしげりけり

扇不離手　扇のみ手にならしつゝ日盛りは筆をもえこそとられざりけれ

早秋風　ふく風のおとこそかはれ山のはの松もはじめて秋やしるらむ

月前蛩　有明の月もさしいる窓の戸にかげさへみえて鳴くきり〴〵す
仲秋月　雲霧もかゝらざりけり大空にこよひとみてる月のひかりに
月明星稀　天の原みちたる星のかげきえて月のひかりになれるそらかな
田家月　をちこちに藁うつおともきこえけり山田のさとの秋の夜の月
秋風　嵐ともおもはざりしを芭蕉の葉ふきやぶりたり庭のあき風
風前雪　吹きすさぶ風のまに〳〵さそはれて家のうちまでつもる雪かな
月前雪　月白くさえたる庭と思ひしはくまなく雪のふれるなりけり
寄國祝　よろこびをいひかはしつゝ國々のをさまるときに逢ふぞうれしき
寄日述懐　さしのぼる朝日の影をかゞみにて世を隈もなくてらしてしがな
心静延壽　村肝の心をひろくやしなはゞながきよはひもたもたざらめや
行　よしあしを人の上にはいひながら身をかへりみる人なかりけり
船　波風のしづかなるひも舟人はかぢに心をゆるさざるらむ

時計　時はかる器はまへにありながらたゆみがちなり人のこゝろは
田家煙　あがたもり心づくしのほどみえて藁やのけぶりたちまさりけり
折にふれて　あまざかるひなのはてまでしげらせむ我が敷島の道教草
われと我が心をり〳〵かへりみよ知らず〳〵も迷ふことあり
政ごといでてき、ぬとおもひしは夢なりけりな庭鳥のなく
世はやすくをさまりぬとて人みなのゆるぶ心ぞ仇となるべき

明治四十二年

立春　日はいまだながゝらねども春たつとおもふ心ぞのどけかりける
立春霞　ひがし山高嶺の梢うら〳〵とかすむや春になりしなるらむ
早春雨　はるさめの長閑なる日になりにけり柳ももえむ梅もかをらむ
早春松　うちなびく霞や色をそへつらむ松のみどりもあらたまりけり

田家早春　けさもまた霜ぞふりけるしづがやの畑の麥生はみどりなれど

山霞　春日野の若草山のあさみどりかすかにみえてかすむ春かな

海邊霞　磯菜つむ少女がころぞきこゆなるみぎはの松のかすみがくれに

遠鳥霞　島山もかすみのおくにかくろひていよ〳〵ひろし春の海原

霞隔行舟　ゆきちがふ小舟もけさはみえぬかなわくる波路のふかき霞に

行路霞　つゝみゆく人の車のおとはしてかすみ小暗き川ぞひのみち

霞隔遠樹　うちわたすかはらの野べの柳原みえずなりけり霞へだてゝ

待早鶯　をさなくも鶯の音ぞまたれけるまだ春風もふかぬのきばに

霞裏聞鶯　花園にまてどきなかぬ鶯はたにふところやはなれかぬらむ

この春はおそくやあらむ鶯の初音きゝつといふ人のなき

われもまたほどなくきかむ鶯のはつねなきつと人のいふなり

咲きそめし花やたづぬる春山のかすみがくれに鶯のなく

初鶯　春たつといふより待ちしうぐひすのこゑたてそむるあさぼらけかな

初春鶯　梅の花ふゝむ垣根にきこゆなりまだとゝのはぬ鶯のこゑ

鶯未出谷　までど〳〵まだ世にいでぬ鶯はたにふところやはなれかぬらむ

鶯遲　散りがたになりにし梅もあるものをなど鶯の聲のきこへぬ

山家鶯　春さむきところときゝし山里もときにおくれず鶯の鳴く

故郷鶯　花の木も老いはてたりし故郷にむかしわすれずうぐひすのなく

竹裏鶯　たかむらの奥にこもりてうぐひすは花の枝にも移らざりけり

鶯呼客　ひとりのみ見るがさびしき花かげに人よびがほに鶯のなく

まねかむと思ひし人を呼びとめてなくうぐひすは心ありけり

馬上聞鶯　鶯の聲するかたにいこへとやさきだつ人の駒とゞめたる

曉鶯　あかつきの風さむからずなりぬらしねぐらながらに鶯の鳴く

朝鶯　あさな〳〵かならず來鳴く鶯をきゝもらしけり事しげくして